

2020 年度

授 業 計 画
(シラバス等)

大阪行岡医療大学

シラバスの利用方法

このシラバスは、受講する科目について、あらかじめ、担当教員が授業に関する情報を提供しておき、学習の効果を高めるために作られたものです。「授業科目概要」、「授業の目的」、「授業計画」、「教科書」、「参考文献」、「成績評価」の順番に授業に関する必要事項が明示されています。この一冊で受講科目の内容がすべてわかるようになっていきますので、よく読んで有効に活用してください。

1. 受講科目を登録する前に

選択科目を登録する時に、科目名だけで判断するのではなく、「科目目標」及び「授業内容」をよく読んで、自分の学ぼうとしている科目がどのようなものであるかを確認してください。

2. 受講の前に

「授業計画」には授業開始から終了までの計画が示されていますので、授業全体の進度や展開の流れを知るうえで、参考になります。授業を受けようとする時、前もってその「授業計画」を知っておくと、学習効果がいつそう高まります。予習の内容や方法、準備しておくべきもの、留意事項等についてあらかじめ知っておくことが大切です。受講の前には必ず読んでおいてください。

3. 受講中に

シラバスは担当者が前もって作成するものですから、学習の状況によっては、授業の内容や進度などが修正されることもありますので注意してください。

4. 受講の後に

受講後に授業内容を復習する時、ノートの整理をする時などにもう一度読み返してみることも必要です。また、授業を欠席した場合にも、その時の授業が何についてであったかを把握できます。

5. 卒業後に

卒業後、就職や進学をする時の提出書類に、在学中に履修した科目内容について記載を求められることがありますので大切に保存しておいてください。

目 次(カリキュラム表)

※令和2年度以降入学者

科目区分	掲載ページ	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			学年別 単位数									
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後		
教養教育科目	心身の理解	8	心理学	1前	2			○											
		9	健康スポーツ科学	1前		1			○										
		10	心の健康と運動	1後	1				○										
	コミュニケーションの理解	-	教育学	2前	2				○										
		-	臨床教育学	2後	2				○										
		11	人間関係学	1後	2				○										
		12	英語コミュニケーションⅠ	1前	1					○	○								
		13	英語コミュニケーションⅡ	1後	1	1					○	○							
		-	医学英語	2後	1						○	○							
		14	キャリアセミナー	1通	1						○	○							
		15	統計学	1前	1	2				○									
		16	情報処理演習	1前	1							○							
		17	脳と心	1後	1	2				○									
	科学の理解	18	法学	1後	2	2				○									
		19	社会福祉学	1前	2					○									
		20	栄養学	1前	2					○									
		21	生化学	1前	2	2					○								
		-	公衆衛生学	2後	2						○								
	-	生命倫理	2後	1						○									
小計(19科目)			-	20	10	0			-										
専門基礎科目	人体の構造と機能	22	運動器系解剖学	1前	2				○										
		23	内臓系解剖学	1後	2				○										
		-	神経系解剖学	2前	2				○										
		24	運動器系生理学	1後	2				○										
		-	内臓系生理学	2前	2				○										
		25	解剖学実習	1後	1							○							
		-	生理学実習	2後	1							○							
	26	運動学	1後	2					○										
	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	-	病理学	2後	2					○									
		-	臨床心理学	2前	2					○									
		-	内科学	2後	2					○									
		-	整形外科	2後	2					○									
		-	神経内科学	3前	1					○									
		-	精神医学	3前	2					○									
		-	小児科学	3前	1					○									
		-	脳神経外科学	3前	2					○									
		-	救急医学	2前	1						○								
		-	薬理学	3前	1						○								
		-	医用画像学	2前	1						○								
		-	臨床検査学	3前		1					○								
		-	スポーツ傷害学	3前		1					○								
		-	ペインリハビリテーション	3後		2					○								
		-	老年期障害学	3前	1						○								
	-	発達障害学	3後	2						○									
	保健医療とリハビリテーション	-	リハビリテーション医学	2後	2					○									
		27	生活支援学	1後	2					○									
		-	チーム医療学	2前	1					○									
		28	感染対策	1前	1					○									
		-	医療安全学	2後	1					○									
		小計(29科目)			-	41	4	0			-								

目 次(カリキュラム表)

※平成28年度～31年度入学者

科目区分	掲載ページ	授業科目の名称	配当年度	単位数			授業形態			学年別 単位数											
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後				
教養教育科目	心身の理解	-	心理学	1前	2			○			必修科目17単位 選択科目6単位以上選択	2									
		-	健康スポーツ科学	1前	1				○			1									
		-	心の健康と運動	1後	1				○				1								
	コミュニケーションと情報の理解	-	人間関係学	1後	2				○					2							
		-	英語コミュニケーションⅠ	1前	1					○			1								
		-	英語コミュニケーションⅡ	1後	1	1				○				1							
		33	医学英語	2後	1					○					1						
		-	キャリアセミナー	1通	1					○				1							
		-	統計学	1前	2					○				2							
		-	情報処理演習	1前	1					○				1							
	科学の理解と社会環境	-	脳と心	1後	1	2				○				2							
		-	法学	1後	2	2				○				2							
		-	社会福祉学	1前	2					○				2							
		-	栄養学	1前	2	2				○				2							
		-	生化学	1前	2	2				○				2							
		34 35	公衆衛生学 生命倫理	2後 2後	2 1					○ ○						2 1					
	小計(17科目)				-	17	9	0	-												
専門基礎科目	人体の構造と機能	-	運動器系解剖学	1前	4				○		必修科目44単位 選択科目4単位以上選択	4									
		-	内臓系解剖学	1後	2				○				2								
		-	神経系解剖学	1前	2					○				2							
		-	運動器系生理学	1後	3					○				3							
		36	内臓系生理学	2前	3					○					3						
		-	解剖学実習	1後	1							○			1						
		37	生理学実習	2後	1								○			1					
		38	人間発達学	2前	1					○					1						
		-	運動学	1後	3					○					3						
	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	39	病理学	2後	2					○						2					
		40	臨床心理学	2前	2					○					2						
		41	内科学	2後	2					○						2					
		42	整形外科学	2後	2					○						2					
		43	神経内科学	3前	1					○							1				
		44	精神医学	3前	2					○							2				
		45	小児科学	3前	2					○							2				
		46	脳神経外科学	3前	2					○							2				
		47	救急医学	2前	1							○			1						
		48	薬理学	3前	1	1						○					1				
		49	臨床検査学	3前	1	1						○					1				
		50	スポーツ傷害学	3前	1	1						○					1				
		51	ペインリハビリテーション	3後	2							○						2			
		52	老年期障害学	3前	1							○					1				
		53	発達障害学	3後	2							○						2			
	保健医療とリハビリテーション	54	リハビリテーション医学	2後	2					○						2					
		-	生活支援学(リハビリテーション工学)	1後	2	2				○					2						
		55	チーム医療学	2前	1					○					1						
		-	感染対策	1前	1					○					1						
	56	医療安全学	2後	1					○						1						
小計(29科目)				-	44	7	0	-													

目次 (カリキュラム表)

※平成27年度以前入学者

科目区分	掲載ページ	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			学年別 単位数									
				必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	1前	1後	2前	2後	3前	3後	4前	4後		
	-	基礎ゼミナール	1前	0			○												
教養教育科目	心と身体 の理解	-	心理学概論	1前	2			○											
		-	体育実技	1通	1					○									
		-	健康スポーツ科学	1後	1				○										
		-	心の健康と運動	1後	2				○										
	コミュニケーションと情報の理解	-	人間関係論	1後	2			○											
		-	学びと表現	1前	1				○										
		-	文学	1前	2				○										
		-	英語 I	1前	1				○										
		-	英語 II	1後	1				○										
		-	英語表現	1後	1		1		○										
		-	医学英語	2後	1				○										
		-	統計学	1前	2				○										
		-	キャリアガイダンス	1前	1				○										
		-	キャリアセミナー	4前	1				○										
		-	情報処理演習	1前	1					○									
		-	コンピューター応用演習	1後	1		1			○									
	-	脳と心	1後	2				○											
	科学と社会環境の理解	-	社会学	1後	2			○											
		-	法学概論	1後	2			○											
		-	歴史学	1前	2			○											
		-	社会福祉学概論	1前	2			○											
		-	環境学	1前	2			○											
		-	栄養学	1前	2			○											
		-	物理学概論	1前	2			○											
		-	生化学	1後	2			○											
		-	公衆衛生学	2後	2			○											
		-	生命倫理	2後	2			○											
小計 (27科目)			-	21	22	0	-												
専門基礎科目	人体の構造と機能	-	運動器系解剖学	1前	4			○											
		-	内臓系解剖学	1後	2			○											
		-	運動器系生理学	1後	3			○											
		-	内臓系生理学	2前	3			○											
		-	解剖学実習	2前	1					○									
		-	生理学実習	2後	1					○									
		-	人間発達学	2前	2			○											
		-	運動学	2前	3			○											
	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	-	病理学	2後	2			○											
		-	臨床心理学	2前	2			○											
		-	内科学	2後	2			○											
		-	整形外科学	2後	2			○											
		-	神経内科学	3前	2			○											
		-	精神医学	3前	2			○											
		-	小児科学	3前	2			○											
		-	脳神経外科学	3前	2		2	○											
		-	救急医学	2前	1					○									
		-	臨床検査論	3前	2		2	○											
		-	スポーツ傷害論	3前	2		2	○											
		-	疼痛論	3後	2		2	○											
	保健医療とリハビリテーション	-	リハビリテーション医学	1後	2			○											
		-	リハビリテーション工学	1後	2		2	○											
		-	チーム医療論	2前	1			○											
		-	感染対策	1前	1			○											
		-	医療安全学	2後	1			○											
		小計 (27科目)			-	40	12	0	-										

科目区分	掲載ページ	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			学年別 単位数							
				必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・実 習	1 前	1 後	2 前	2 後	3 前	3 後	4 前	4 後
専 門 科 目	基礎 理学 療法	理学療法学概論	1前	2			○				2						
		運動療法学	2前	2			○										
		運動療法学演習	2後	1				○			2						
		物理療法学	2前	2			○										
		物理療法学演習	2後	1				○			2						
		日常生活活動学	2後	2			○										
		日常生活活動学演習	3前	1				○									
	障害 の 評価	障害診断論	1後	2				○			2						
		骨格系障害評価法	2前	1					○								
		筋系障害評価法	2前	1					○								
		神経系障害評価法	2後	2					○								
		呼吸器障害評価法	3前	1					○								
		循環代謝障害評価法	3前	1					○								
		臨床運動学演習	2後	1					○								
	理学 療法 各 論	骨・関節障害理学療法	3前	2					○								
		中枢神経障害理学療法	3前	2					○								
		神経筋障害理学療法	3後		2				○								
		呼吸器障害理学療法	3後	1					○								
		循環代謝障害理学療法	3後	1					○								
		発達障害理学療法	3後		1				○								
		老年期障害理学療法	3後		1				○								
		スポーツリハビリテーション	3後		2				○								
		地域リハビリテーション	3前		2				○								
		義肢補装具学	3前	2					○								
		義肢補装具療法	3後	1						○							
		理学療法学総合演習Ⅰ	3前	1						○							
		理学療法学総合演習Ⅱ	3後	1						○							
	臨床 実 習	臨床体験実習	2前	1							1						
		臨床評価実習	3後	3													
		臨床総合実習Ⅰ	4前	6													
		臨床総合実習Ⅱ	4後	8													
	研 究 業	理学療法研究論	3前	1				○									
		卒業研究	4通	4													4
小計 (33 科目)			—	54	8	0	—	—	—	28	27	20	20	26	17	7	12
合計 (87 科目)			—	115	42	0	—	—	—	小計	55	40	43	19			
										合計	157						

学位又は称号	学士(理学療法学)
学位又は学科の分野	保健衛生学関係 (リハビリテーション関係)

	1年	2年	3年	4年
必修	31	40	25	19
選択	24	0	18	0
小計	55	40	43	19
合計	157			

授業期間等	
1 学年の学期区分	2 学期
1 学期の授業期間	15 週
1 時限の授業時間	90 分

卒業要件及び履修方法
教養教育科目の必修21単位及び選択6単位以上、専門基礎科目の必修40単位及び選択2単位以上、専門科目の必修54単位及び選択5単位以上の合計128単位以上を修得すること。

履修科目の登録の上限
1年 50単位(年間) 2年以降 42単位(年間) 成績優秀者は上限がなくなります。

履修及び進級要件
1) 「臨床評価実習」を履修登録するにあたり、「臨床体験実習」を修得しておかねばならない。 2) 4年次に進級し、「臨床総合実習Ⅰ」「臨床総合実習Ⅱ」「卒業研究」を履修登録するにあたり、「キャリアセミナー」「臨床総合実習Ⅰ」「臨床総合実習Ⅱ」「卒業研究」を除き、3年次までに開講している全必修科目を含む109単位を修得しておかねばならない。

科 目 名	心理学
担 当 教 員	金井 桂子
単 位、必 修・選 択	2 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	1 年 次 前 期 講 義
授 業 科 目 概 要	人間の行動や心のしくみを理解するために、心理学の歴史や心理学各分野の基礎的知識を習得することを目標とする。日常観察される人間の行動に関心を持ち、観察し、考察する態度を養い、医療の現場で活用できるようにする。具体的には、人間の行動を促す動機、学習と記憶、子供・青年期・成人期の発達、パーソナリティと対人関係などについて教授する。
授 業 の 目 的	心理学はこころの学問であるが、心理学を学ぶということは、人間そのものについての多角的理解を深めることでもある。人間がどのように外界の情報を取り入れ行動しているか、さらに行動の背景にある人間関係を理解し、自己理解や他者（患者）理解、洞察力を深め、さまざまな心理的・身体的状況を生きておられる患者様に対してより良い治療を行なうために、心理学の基礎知識を身につけることを目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 心理学とは何か：オリエンテーション、心理学の歴史 2. 感覚と知覚 3. 記憶 4. 思考・言語・知能 5. 学習①：学習とは（古典的条件づけ、オペラント条件づけ） 6. 学習②：主な学習理論 7. 感情と動機づけ（感情の諸相、感情のメカニズム、動機づけ） 8. 性格とパーソナリティ：特性論、類型論、性格の測定 9. 社会と集団 10. 発達①様々な発達理論 11. 発達②心の発達段階と発達課題 12. 心理臨床①（心の適応と不適応、ストレス反応、さまざまな心の問題） 13. 心理臨床②：心理療法とカウンセリング 14. 医療職と対人援助（患者の心理・バーンアウト） 15. まとめ
教 科 書	『心理学（カレッジ版）』著 山村 豊、高橋 一公，医学書院，2019. 毎回の授業においてプリント配布
参 考 文 献	特になし。プリント枚数が多いので、ファイル用意してください。自己理解のために「私の木」「対人地図」などワークショップします。ビデオ教材など使用予定。
成 績 評 価	前期試験（60%）、授業時に提出する宿題およびレポート（40%）により総合的に評価する。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	健康スポーツ科学
担 当 教 員	栗田 剛寧
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 選択
履修対象・形態	1年次 前期 演習
授業科目概要	科学的根拠に基づいたスポーツや健康の意義について理解することを目標とする。健康スポーツとして心身の健康維持と増進を目的に行われるスポーツ活動が、心身に及ぼす効果を具体的に理解する。また、健康と医科学的観点から、スポーツ活動の効果が生活習慣病等の慢性疾患の予防につながることをふまえて、その効果の基礎的事項を講義し、実際の運動処方に必要な体力測定や運動プログラムの立案等の実技を行い基本的考え方を習得する。
授業の目的	様々な身体活動や体力測定等を通じ自身の体力やからだについてのきづきを高め、日常生活における運動の重要性の理解を深める。また、スポーツを通じ、コミュニケーションスキルを体と心で習得する。さらに、理学療法士が関わることの多い、生活習慣病やロコモティブシンドロームについての基礎知識を習得する。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 体力測定 3. トレーニング概論 4. 筋力トレーニングについて 5. 体幹トレーニングの実践 6. さまざまなストレッチングについて 7. 糖尿病について 8. 脳卒中について 9. 腰痛について 10. 骨粗鬆症について 11. スポーツ傷害の基礎知識 12. スポーツ種目の実践 13. スポーツ種目の実践 14. 体力測定 15. まとめ
教科書	必要に応じて資料を配布する。
参考文献	なし
成績評価	講義で行った内容については筆記試験を実施する。 実技での取り組みと、上記の筆記試験を総合して評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	心の健康と運動
担 当 教 員	中原 英子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	1年次 後期 講義
授業科目概要	精神的ストレスや身体的ストレスが病気の原因や誘因となる事はよく知られている。しかし、運動や生活活動にみられる身体的ストレスは適度に行った場合にはかえって健康に貢献する。すなわち、適度のストレスは健康を維持するために必要である。本講義では、心と体の相互関係や運動との関連、ストレスによる生体反応について具体的に講義する。さらにストレス緩和方法といわれている技法が生体に与える影響やメカニズムについて解説し、自他共に心身の健康について考える。
授業の目的	日常生活にとどまらず、社会的に存在するストレス要因を心理学的な手法でとらえるだけでなく、その社会的背景要因を考察し、ストレスに対応する手立てを考える。まずは日常生活で経験される事象や社会、学校や職場に関連した事象などを例示しながら、解説する。ストレスによる生体反応を具体的に解説しながら、その捉え方を知り、普段と違う身体的事象を理解する。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. ストレスと病気 2. うつ病、不安と運動 3. 心肺機能と運動 4. 筋肉とその働き 5. 筋肉の種類と神経支配 6. 運動と疲労、免疫、オーバートレーニング 7. 睡眠障害、メラトニン、ストレス対処法 8. 呼吸法、セロトニン、メラトニン
教科書	講義に関連した資料を随時配布する。
参考文献	講義内で紹介する。
成績評価	後期試験、小レポートから、総合的に評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	人間関係学
担 当 教 員	高井 範子
単 位、必 修・選 択	2 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	1 年 次 後 期 講 義
授 業 科 目 概 要	医療や社会福祉などの対人援助サービスでは、情報の正確さや他者の気持ちをありのままに受容する基本的な姿勢は不可欠である。本講義の目標は、正確な情報によるコミュニケーションと好ましい人間関係を築くためのスキル（技能）を実践的に身につけることである。そのために、自らの意見を論理的に述べることや、情報を的確かつ簡潔に伝えるための文章や表現の工夫、他者に対する感受性を豊かにする方法などについて教授する。
授 業 の 目 的	医療や社会福祉などの対人援助サービスの人間関係においては、患者との信頼関係を構築するためにコミュニケーションスキルは不可欠である。本科目においては、①発達段階的視点や社会的視点における様々な人間関係について学び、その特徴を理解する。②他者（患者）受容をはじめとして、より良い人間関係を構築するために役立つ知識や技能を理解する。③信頼される医療人となるためにロールプレイングをとおしてコミュニケーションスキルを身につけることを目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 人間関係学を学ぶにあたって：さまざまな人間関係と自己との関連 2. 発達の視点からみた人間関係Ⅰ：乳幼児期の親子関係 3. 発達の視点からみた人間関係Ⅱ：幼児期から成人期における人間関係 4. 医療現場においてよりよい人間関係を構築するための自己理解 5. 職業からみた人間関係：職場の人間関係 6. 人間関係の悩みとその克服：人間関係に関する悩み、さまざまな対処法 7. 臨床心理学的視点からみた人間関係：対人関係に関連した精神病理 8. 人間関係における非言語行動：ロールプレイング（ピア・サポートに向けて） 9. 対人援助サービスで活かすカウンセリングの知識と技法 10. 親密な人間関係：恋愛の心理，対人認知要因 11. 医療現場に活かすヘルス・コミュニケーション 12. 健康増進のヘルス・コミュニケーションⅠ：ロールプレイング 13. 健康増進のヘルス・コミュニケーションⅡ：振り返り 14. 専門家と受益者の人間関係：医療者と患者の人間関係 15. まとめ
教 科 書	『発達・社会からみる人間関係－現代に生きる青年のために（第3版）』，西垣悦代（編），北大路書房，2009.
参 考 文 献	『人を育む人間関係論－援助専門職として，個人として』，服部祥子，医学書院，2003.
成 績 評 価	後期試験（60%），レポート（20%），授業コメントと授業中の課題（20%）等を総合的に評価する。毎回の予習・復習をしっかりとしておくこと。

科 目 名	英語コミュニケーション I
担 当 教 員	仲渡 一美
単位、必修・選択	1 単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	1 年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	英語学習に対する動機付けをして、各自の語学能力に自信をもたせることが目標である。基本的な構文の復習や自己表現の手段としての英語学習を行う。特に英文の読解に重点をおいて、基礎的知識を学習する。
授 業 の 目 的	<ul style="list-style-type: none"> ・ 様々なトピックを読み、サマリーを完成させ訳さずに理解する読解力をつける。 ・ 内容に関して主体的に考え、英語で発信し、議論する力を養う。 ・ リスニング・スピーキング練習を行い日常や医療現場でも応用できる実践的英語の基礎力を身につける。 ・ コミュニケーションのための演劇演習において英語で表現することを学ぶ。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. Unit 1: Desert Wisdom 2. Unit 2: The Power of Friendship 3. Unit 3: Cell Phone Culture 4. Unit 4: Men are from Mars, Women are from Venus 5. Unit 5: The Beginning Part of Botchan 6. Unit 6: Guernica 7. Unit 7: The Art of Lying 8. 中間テスト・演劇（英語劇）パフォーマンスについて 9. Unit 8: Fujisan 10. Unit 9: The Three Secrets to Persuasion 11. Unit 10: Malala Yousafzai Nobel Peace Prize Lecture 12. Unit 12: Eating Disorders 13. 演劇ワーク準備・音読テスト 14. 演劇ワーク 15. 復習
教 科 書	『English through Active Learning-Read to Think and Speak』 / 鳥飼慎一郎 他著 朝日出版社 / 2019年
参 考 文 献	補助教材、参考文献は授業中にプリントを配布します。
成 績 評 価	前期試験60%と、小テスト、発表など授業への参加度40%を合わせて総合的に評価します。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	英語コミュニケーションⅡ
担 当 教 員	仲渡 一美
単位、必修・選択	1単位 選択
履修対象・形態	1年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	英語を聞き話すという基本的手法を習得することを目標とする。英会話を習熟するために、会話の基本を知ったうえで、正確な聞き取りと自信を持った話し方を学習する。
授 業 の 目 的	<ul style="list-style-type: none"> ・医療現場で必要とされるコミュニケーション力や基本医療学用語を習得する。 ・コミュニケーションのためのリスニング・スピーキング力を身につける。 ・医療エッセイを読み、自ら学び考え、発見した知見を発信する力をつける。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. Chapter 1: Welcoming a Patient 2. Chapter 2: Taking Vital Signs 3. Chapter 3: Pain Assessment 4. Chapter 4: Feeling So sick 5. Chapter 5: Transferring a Patient 6. Chapter 6: Medical Departments 7. Chapter 7: Review Test & Medical Terminology 8. Chapter 8: Personal Care 9. Chapter 9: Chronic Diseases 10. Chapter 10: Critical Care / Operating Room 11. Chapter 11: まとめと医学英文読解 12. プレゼンと基本と準備 13. プレゼンテーション 14. プレゼンテーション 15. 復習
教 科 書	『Talking with Your Patients in English』/平野美津子 Christine D. Kuramoto 落合亮太著/成美堂/2019年
参 考 文 献	補助教材、参考文献は授業中にプリントを配布します。
成 績 評 価	後期試験60%と、小テスト、発表など授業への参加度40%を合わせて総合的に評価します。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	キャリアセミナー
担 当 教 員	鶴崎 智史、栗田 剛寧、水野 稔基、荒木 智子、石川 みづき
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	1年次 通年 演習
授業科目概要	自己実現や社会貢献ができる社会人になるために大学生活における学習や人間関係の構築について理解する。また講義内容の要約やグループ討議を行う。コミュニケーション能力の向上のため日常の学習内容の整理・報告を行い、模範となる形式を習得する。学内・外でのボランティア活動など、社会に参加する上で、特に理学療法士を目指す学生として必要とされるマナーや接遇の講義を取り入れ、大学生活の早期から幅広く人や社会への関連を深めていく。理学療法士業務の理解を進めるため、病院の見学を行う。
授業の目的	社会人、医療人としての望まれる言動と行動について、自ら考え、実行していく意識を高める。将来、理学療法士として働くことを念頭に置き、勤務する現場を見学し、必要とされる能力を考える。また、学生生活のあり方を考える機会とする。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 自己分析ワーク 3. 基礎学力テスト① 4. 基礎学力テスト② 5. 医療・福祉業界の動向について① 6. 医療・福祉業界の動向について② 7. 個人情報保護について 8. 社会人マナーとしてのコミュニケーション 9. 学習レポートの作成 10. 理学療法士の仕事体験① 11. 理学療法士の仕事体験② 12. 医療機関への見学実習オリエンテーション 13. 医療機関への見学実習前ワーク 14. 医療機関への見学実習後ワーク 15. まとめ
教科書	『PT・OTのための これで安心 コミュニケーション実践ガイド 第2版』/山口美和/医学書院/2016年
参考文献	なし
成績評価	複数の課題レポートにより総合評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	統計学
担 当 教 員	幸田 利敬
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 選択
履修対象・形態	1年次 前期 講義
授業科目概要	<p>統計学の基本的な概念を理解した上で仮説検定や推定の方法論を学習することを目的とする。学習目標は統計を用いて表現されたものを理解できるようになることと統計学的にデータ整理ができることである。具体的には①代表値と分布、②平均値の差の検定、③比率の差の検定、④回帰分析、⑤適合度の検定など、医療や保健分野に比較的多用されている統計手法について学習をすすめ、医療情報の信頼性や有用性を考える能力を養う。</p>
授業の目的	<p>統計学は、医学の分野でも非常に多く活用されている。大量のデータをわかりやすく表現し、有効な情報を得るためにも必須のツールとなる。そのため医療従事者が統計学の知識と活用法を知っておく必要がある。統計学の基礎を身につけ、将来の学習や研究のためにも統計学的手法を知る必要がある。統計学を医学へ応用するための初歩的な考え方と活用手段を身につけることが目的である。</p> <p>授業には、必ず電卓（四則演算、ルート計算、メモリー機能のあるもの）を持参すること。授業の復習と練習問題は必ず実施すること。</p>
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 統計学概論、統計学に必要な基礎数学 2. データの尺度・標本分布 2. データのまとめと表現（作表、作図） 4. 記述統計① 5. 正規分布と標準偏差 6. 統計的仮説検定の基礎 7. 検定の基礎－差の検定① 8. 検定の基礎－差の検定② 9. 検定の基礎－差の検定③ 10. 検定の基礎－分割表検定① 11. 検定の基礎－分割表検定② 12. 検定の基礎－相関・回帰分析① 13. 検定の基礎－相関・回帰分析② 14. その他の検定 15. 国家試験問題への対応
教科書	『PT・OTのための統計学入門』/三輪書店 資料を随時配布します
参考文献	なし
成績評価	<p>前期試験により評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。</p>

科 目 名	情報処理演習
担 当 教 員	三井 哲裕
単位、必修・選択	1 単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	1 年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	情報理論は通信・記録のためのデータ処理の基礎となる学問である。本演習では、情報とは何か、情報処理とは何か、という情報学の基礎を学び、コンピューターによるデータ処理ができることを目標とする。具体的には、①コンピューターの基本的な仕組み、②人間が計算できる問題・計算理論、③メッセージの長さを短くするための符号化と情報理論等の情報学の基礎的な事項について理解した上で、演習を通じた学習を進める。
授 業 の 目 的	Word を使い、文章の検索や編集技術、イラスト・写真・表等のオブジェクトの編集が出来るようになる。PowerPoint で、簡潔な発表資料をつくりプロジェクタによる表示ができるよう操作を学ぶ。Excel ではデータの表・グラフの作成・表示ができ、分析ツールも使えるようになり、Word、PowerPoint のファイルにリンクして使えるようになる。研究発表に必要な技術を身に付けることを目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. パソコンの基本操作とセキュリティ 安全対策 2. Word の入力法 オブジェクト 図形の作成 図形の編集 3. 文章の編集 箇条書き 段組 縦書き・横書き ページ設定 4. 書式に合わせた文章作り 出力 (印刷、PDF、Web ページ) 5. Excel の基本(セルへの数値・文字入力、計算式の入力)フィルハンドル 6. Excel でグラフの作成 7. Excel の関数の基礎 セルの表示形式 8. Excel の日付関数と作表 (予定表、カレンダー) ユーザー定義の利用 9. 分析ツールの操作法 度数分布表とヒストグラム 乱数発生 10. PowerPoint でスライドに文字入力、クリップアートの入力 11. PowerPoint でアニメーション効果、スライドデザインを使う 12. PowerPoint でスライドショーを行う プロジェクタの知識 13. Excel の表・グラフを Word の文章に貼り付ける 14. PowerPoint のスライドを、Word と Excel で作った資料を使って作成する 15. 総復習
教 科 書	『Windows7・Office2010 による情報処理入門 Windows7 Word Excel PowerPoint』/安積淳, 八野真弓/実教出版/2010 年
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	前期試験 (パソコンの実習試験) 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	脳と心																														
担 当 教 員	三雲 真理子																														
単 位、必 修・選 択	2 単 位 選 択																														
履 修 対 象・形 態	1 年 次 後 期 講 義																														
授 業 科 目 概 要	近年、脳の活動を測定する技術のめざましい進歩とともに、我々の多様なこころの働きを脳から理解することが可能になりつつある。どのようにして目で見えたものが何であるかがわかるのか。どのようにして記憶し、なぜ忘れるのか。どのようにして考えたり、しゃべったりするのか。感情はどこから生まれるのか。人間のこのような精神活動と脳（神経）構造・機能との関連性について理解を深める。																														
授 業 の 目 的	私達は脳で見たり、聞いたり、味わったり、においを捉えたりしています。また喜び、怒り、悲しみ、楽しみ、悩みなどの心の動き（感情）も脳で起こります。脳の基本的構造や働きについて理解を深め、脳の精密さ、生命の神秘に触れ、普通に生活を送ることができる喜びを感じてください。また、脳の障害により不自由な生活を送られている方が、どのような辛さ、不便さを抱えておられるか、少しでも理解できるような心を育んでください。																														
授 業 計 画	<table border="1"> <tr> <td>1. 1. 脳の構造と働き</td> <td>1-1. 脳の3段階構造と心身相関</td> </tr> <tr> <td>2.</td> <td>1-2. 脳幹の構造と働き</td> </tr> <tr> <td>3.</td> <td>1-3. 大脳辺縁系の構造と働き</td> </tr> <tr> <td>4.</td> <td>1-4. 大脳辺縁系の構造</td> </tr> <tr> <td>5. 2. 脳の細胞と情報の伝達</td> <td>2-1. 神経細胞と情報伝達</td> </tr> <tr> <td>6.</td> <td>2-2. 神経伝達物質</td> </tr> <tr> <td>7. 3. 大脳皮質の働き</td> <td>3-1. 機能局在が明瞭な感覚野と運動野(1)-(3)</td> </tr> <tr> <td>8.</td> <td>3-1. 機能局在が明瞭な感覚野と運動野(4)-(6)</td> </tr> <tr> <td>9.</td> <td>3-2. 機能局在が不明瞭な連合野(1)-(3)</td> </tr> <tr> <td>10.</td> <td>3-2. 機能局在が不明瞭な連合野(4)-(6)</td> </tr> <tr> <td>11. 4. 右脳と左脳</td> <td>4-1. 大脳半球機能差</td> </tr> <tr> <td>12.</td> <td>4-2. 男女の脳の違い</td> </tr> <tr> <td>13. 5. 睡眠と脳波</td> <td>5-1. 脳波測定について</td> </tr> <tr> <td>14.</td> <td>5-2. 睡眠段階と脳波</td> </tr> <tr> <td>15.</td> <td>5-3. レム睡眠とノンレム睡眠</td> </tr> </table>	1. 1. 脳の構造と働き	1-1. 脳の3段階構造と心身相関	2.	1-2. 脳幹の構造と働き	3.	1-3. 大脳辺縁系の構造と働き	4.	1-4. 大脳辺縁系の構造	5. 2. 脳の細胞と情報の伝達	2-1. 神経細胞と情報伝達	6.	2-2. 神経伝達物質	7. 3. 大脳皮質の働き	3-1. 機能局在が明瞭な感覚野と運動野(1)-(3)	8.	3-1. 機能局在が明瞭な感覚野と運動野(4)-(6)	9.	3-2. 機能局在が不明瞭な連合野(1)-(3)	10.	3-2. 機能局在が不明瞭な連合野(4)-(6)	11. 4. 右脳と左脳	4-1. 大脳半球機能差	12.	4-2. 男女の脳の違い	13. 5. 睡眠と脳波	5-1. 脳波測定について	14.	5-2. 睡眠段階と脳波	15.	5-3. レム睡眠とノンレム睡眠
1. 1. 脳の構造と働き	1-1. 脳の3段階構造と心身相関																														
2.	1-2. 脳幹の構造と働き																														
3.	1-3. 大脳辺縁系の構造と働き																														
4.	1-4. 大脳辺縁系の構造																														
5. 2. 脳の細胞と情報の伝達	2-1. 神経細胞と情報伝達																														
6.	2-2. 神経伝達物質																														
7. 3. 大脳皮質の働き	3-1. 機能局在が明瞭な感覚野と運動野(1)-(3)																														
8.	3-1. 機能局在が明瞭な感覚野と運動野(4)-(6)																														
9.	3-2. 機能局在が不明瞭な連合野(1)-(3)																														
10.	3-2. 機能局在が不明瞭な連合野(4)-(6)																														
11. 4. 右脳と左脳	4-1. 大脳半球機能差																														
12.	4-2. 男女の脳の違い																														
13. 5. 睡眠と脳波	5-1. 脳波測定について																														
14.	5-2. 睡眠段階と脳波																														
15.	5-3. レム睡眠とノンレム睡眠																														
教 科 書	毎回の授業においてプリント配布																														
参 考 文 献	なし																														
成 績 評 価	後期試験 70%、提出レポート 30%から総合的に評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。																														

科 目 名	法学
担 当 教 員	戸浦 雄史
単位、必修・選択	2単位 選択
履修対象・形態	1年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	法の本質を踏まえ、法についての一般的・基礎的な考え方を学ぶことを目標とする。「法とは何か」についての基礎的な考え方を学び、「法的にものを考える力」を養う。そして、社会生活にかかわる法律問題をはじめ、時事法律問題や現代の法律問題についても教授する。
授 業 の 目 的	法的知識の基礎とその使い方を身につける
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロ：何のために「法学」を学ぶのか 2. 法学入門1：法律「関係」と法分野 3. 法学入門2：「法源」論と法手続 4. 公法概論1：憲法と人権 5. 法学入門3：近代法システムの全体像 6. 民事法概論1：民法の全体像 7. 民事法概論2：財産法と家族法 8. 民事法概論3：法律行為と成年後見 9. 民事法概論4：物権と債権 10. 民事法概論5：契約と不法行為 11. 公法概論2：行政法の全体像 12. 公法概論3：社会保険制度と行政法 13. 医事法概論1：医事法の全体像 14. 医事法概論2：医療に関わる組織と資格 15. 医事法概論3：医療行為と責任
教 科 書	『医療・福祉を学ぶ人のための法学入門』／初版／久保純一・長沼建一郎・森田慎二郎（編）／法律文化社／2012
参 考 文 献	『医事法入門』／第5版／手嶋豊／有斐閣アルマ／2018 『コ・メディカルのための医事法学概論』／初版／野崎和義／ミネルヴァ書房／2011
成 績 評 価	授業中に課す課題と後期試験によって評価する 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと

科 目 名	社会福祉学
担 当 教 員	鶴崎 智史
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	1年次 前期 講義
授業科目概要	社会福祉の概念について学び、社会福祉の対象とする問題及びその背景について理解することを目標とする。わが国の社会福祉・社会保障制度、社会福祉の援助の方法論などを学習する。具体的には、①対人援助法、②医療ソーシャルワーク論、③社会福祉法制、④社会保険制度、⑤生活地域における医療・保健・福祉の連携などについて教授し、学生との議論の場も設定して理解を深める。
授業の目的	現代では社会福祉の領域は非常に広範囲にわたっており、私たちの生活のさまざまな面にかかわっている。このような社会福祉の根底を貫く原理を理解するとともに、理学療法士にとって必要な社会福祉についての基本的な知識を習得することが目標である。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 社会福祉の基礎 2. 社会福祉の仕組みと運営 3. 社会福祉の援助と方法 4. 社会保障、公的扶助 5. 医療保険制度, グループ学習のオリエンテーション 6. 高齢者福祉 (総論) 7. 高齢者福祉 (介護保険制度) 8. 高齢者福祉 (地域包括ケアシステム) 9. 障害者福祉 10. } 11. } グループでの学習課題に取り組み、その成果をグループ単位で発表する。 12. } 13. 子ども家庭福祉、地域福祉 14. これからの社会福祉の課題 15. 総括
教科書	『よくわかる社会福祉 第11版』/山縣文治・岡田忠克 編 /ミネルヴァ書房 /2016年
参考文献	適宜配布
成績評価	前期試験 70点, グループ学習 30点 成績評価の詳細は第一回目の講義にて発表。

科 目 名	栄養学
担 当 教 員	福井 紀子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	1年次 前期 講義
授業科目概要	食生活に栄養の知識を活かし、健康の維持・増進、疾病の予防・治療が図れるよう、栄養に関する基本的事項を理解する。その基本的事項として、栄養の概念、栄養素の構造と機能を概説し、続いて摂食行動、消化・吸収と栄養素の体内動態、さらに3大栄養素である糖質、脂質、蛋白質の栄養について主に臓器および個体レベルで解説する。
授業の目的	基本的事項である栄養の概念、栄養素の構造と機能、摂食行動、消化・吸収された栄養素がどのように代謝・利用されていくのか。 五大栄養素について理解し、リハ栄養の中心にあるフレイルやサルコペニアの予防に向き合っていける知識を身につける。 また、疾病別の食事療法の概念を学ぶ。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 栄養とは。三大栄養素と五大栄養素 2. 糖質について 3. タンパク質について 4. 脂質について 5. ビタミンとミネラル① 6. ビタミンとミネラル② 7. 食物繊維と水 8. 栄養補給法① 9. 栄養補給法② 10. 食事療法について① 11. 食事療法について② 12. 栄養アセスメント① 13. 栄養アセスメント② NST 活動の実際 14. リハ栄養について 15. まとめ
教科書	『コンパクト栄養学 改訂第4版』/脊山洋右・廣野治子編/南江堂
参考文献	『糖尿病食事療法のための食品交換表 第7版』/日本糖尿病学会編著/文光堂
成績評価	前期試験 100点満点、授業中の様子を考慮 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと

科 目 名	生化学
担 当 教 員	高畑 佳史
単 位、必 修・選 択	2 単 位 選 択
履 修 対 象・形 態	1 年 次 前 期 講 義
授 業 科 目 概 要	生命活動を分子レベルで理解するために、生物体を構成する物質の構造、性質、機能、分布、存在状態を調べ、物質の示す生物学的機能の化学構造との関連や生命現象における意義が生化学分野で解析されてきた。本講義では、分子レベルでの生命現象の理解を目標とし、具体的には、細胞の基本構造、糖質・脂質・アミノ酸の代謝、酵素とエネルギー代謝、ビタミンや生体膜、遺伝などについて教授する。
授 業 の 目 的	生命活動を行うために必須である代謝に関して、分子レベルでの理解が求められる。生命を構成する細胞の学習に始まり、一般生化学として、それぞれの代謝（糖代謝、タンパク質代謝、脂質代謝）の理解と、代謝に異常が生じた場合の疾患、症候について習得する。さらに後半では、運動器系としての役割を担う筋骨格系器官を構成する細胞とその働きを学習し、ホルモン、細胞内情報伝達機構と関連づけて筋骨格系の代謝機構について理解を深める。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 生体の構成要素（1） - 細胞の役割と構造 2. 生体の構成要素（2） - 生体の主要な構成要素とその働き 3. 生体における化学反応（1） - 消化と吸収 4. 生体における化学反応（2） - エネルギー代謝と化学反応 5. 糖質の代謝 - 好気呼吸によるエネルギー産生 6. 糖質の代謝 - 嫌気呼吸によるエネルギー産生 7. 血糖調節機構と糖尿病 8. 脂質、タンパク質の代謝 9. 生体における恒常性 10. ホルモン・増殖因子・サイトカイン 11. 硬組織の形成と吸収のしくみ 12. 細胞内情報伝達 13. DNA 複製、転写、翻訳 14. 遺伝子発現の調節 15. 遺伝子とゲノムの解析（遺伝子工学）
教 科 書	わかりやすい生化学/第5版/石黒伊三雄・篠原力雄 監修/ヌーヴェルヒロカワ/平成29年
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	定期試験（前期）によって評価する。講義は私語を慎み、静粛に受けること。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	運動器系解剖学
担 当 教 員	松尾 高行、山野 宏章
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	1年次 前期 講義
授業科目概要	身体運動に関する器官として、骨・関節・筋・神経の各部の構造と形態の特徴を学習し、身体運動を理解する基盤を身につけることを目的とする。人体標本等の利用により、立体的な構造のイメージを深める。内容は①解剖学総論(解剖学の歴史、解剖学用語)、②人体の区分、③骨・関節(骨の構造と分類、各部の骨の形態、関節の構造と分類、各部の関節と靭帯)、④筋系(筋の構造と分類、各部の筋の起始と停止、筋の作用と神経支配)、⑤神経系(神経の構造分類)について講義する。
授業の目的	衰えた運動機能の回復がその主要目的である理学療法学にあつては、骨格や筋肉などの運動器官の解剖学的知識の修得は極めて重要である。授業においては、細胞と組織、骨格系、関節靭帯系、筋系の形態を機能と関連付けながら理解させる。さらに必要に応じて、それらの運動器官の発生や組織学的形態に関する知見を示して総合的な理解を深めさせ、この分野の科学に対する興味と関心を引き出すことを目的とする。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 解剖学総論：人体の大要、細胞、組織、器官 2. 骨学総論：骨の組織構造、機能、発生、 3. 骨学各論：頭蓋骨、脊柱、胸郭 4. 上肢の骨、下肢の骨 5. 頭頸部・体幹の関節と靭帯 6. 上肢の関節と靭帯 7. 下肢の関節と靭帯 8. 筋学総論：筋組織の種類、骨格筋の構造と作用 9. 筋学各論：上肢帯・上腕の筋 10. 前腕・手の筋 11. 下肢帯・大腿の筋 12. 下腿・足の筋 13. 頭・頸部の筋 14. 胸・腹部の筋 15. 背部の筋
教科書	『標準理学療法学・作業療法学-専門基礎分野 解剖学 第4版』/医学書院/2017年 『解剖トレーニングノート』/竹内修二著/医学教育出版社/2016年
参考文献	『グレイ解剖学 原著第2版』塩田浩平ら[訳]/エルゼビア・ジャパン/2011年 『プロメテウス解剖学アトラス』解剖学総論・運動器系(第2版)/監訳 坂井建雄・松村譲児/医学書院/2011年 『人体の正常構造と機能』総編集/坂井建雄・河村克雅(編)/日本医事新報社/2008年 『ボディ・ナビゲーション～触ってわかる身体解剖～(改訂版)』A. Biel 著, 監訳 阪本桂造/医道の日本社/2012年
成績評価	中間試験、前期試験、小テスト等の結果を総合して評価する。 講義に関して、十分な予習と復習をすること。

科 目 名	内臓系解剖学
担 当 教 員	稲垣 忍
単 位、必 修・選 択	2 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	1 年 次 後 期 講 義
授 業 科 目 概 要	内臓系全般の成り立ちと形態の特徴について理解し、理学療法を学ぶ上での基礎知識を高めることを目的とする。人体標本等の利用により学習する。内容は①循環器系、②呼吸器系、③消化器系、④泌尿器系、⑤内分泌系、⑥生殖器系等の形態の特徴について講義する。さらに、発生学及び組織学的な視点からも理解を深められるように学習する。
授 業 の 目 的	内臓系全般の成り立ちと形態的特徴について理解し、理学療法を学ぶ上での基礎知識を高めることを目的とする。そのために身体の重要な臓器について、循環器系、消化器系、泌尿器系、生殖器系、内分泌系の分類に従って、形態学的基礎知識を修得する。また、一個の受精卵から人体が発生するまでの形態学的過程を学ぶ。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 細胞・組織概論 細胞の構成要素 2. 細胞分裂と染色体 3. 上皮組織 4. 支持組織 結合組織、血液 5. 支持組織 軟骨、骨組織 6. 筋組織 7. 循環器系 8. 消化器系 I 9. 消化器系 II 10. 呼吸器系 I 11. 呼吸器系 II 12. 泌尿器系 I 13. 泌尿器系 II 14. 人体の発生、生殖器系 15. 生殖器系、これまでの学習の確認・総括
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学-専門基礎分野 解剖学 第4版』/医学書院 『解剖トレーニングノート』/竹内修二著/医学教育出版社
参 考 文 献	組織細胞生物学 南江堂 トートラ人体解剖生理学 日本語版 丸善出版 『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学 第5版』/医学書院
成 績 評 価	試験の成績による 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと

科 目 名	運動器系生理学
担 当 教 員	石川 みづき
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	1年次 後期 講義
授業科目概要	運動器系の機能を骨格系の生理学の内容として、骨の発生と成長、運動による骨の循環系と神経系の変化、運動による関節包、滑膜と滑液、関節円板と関節半月、関節軟骨などの生理学的変化を学習することを目的とする。筋系の生理学の内容として、運動による骨格筋の血管への変化、骨格筋の微細構造と筋収縮機序、神経筋接合部と神経筋伝達、筋肥大と筋萎縮などの筋系の生理学的変化などが含まれる。神経系の生理学の内容として、構造的に脊髄、脳幹、小脳、基底核、大脳皮質などの階層があり、運動によって身体各部間の情報を伝達する生理学的変化について理解を深める。
授業の目的	一般に生理学は古くから植物性機能と動物性機能に大きく分類され、体系化されている。本講義においては、その中の動物性機能の主要生理機能である骨格筋と神経感覚器系を中心にその基礎的生理学理論を学習すると共に運動に要するエネルギー獲得機能のメカニズムを学習することを目的とする。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 第1章：生理学とは(運動器系生理学の概要) 2. 第12章：神経系の基礎 1(興奮のメカニズム) 3. 第12章：神経系の基礎 2(興奮の伝導・伝達のメカニズム) 4. 第14章：脳 1(中枢神経系機能・記憶と学習) 5. 第14章：脳 2(睡眠と覚醒) 6. 第13章：自律神経系 1 (体性神経系)・末梢神経(配布資料) 7. 第15章：感覚 1(感覚概要・視覚) 8. 第15章：感覚 2(聴覚・平衡感覚・体性感覚) 9. 第16章：運動の調節 1 (運動支配中枢)・動物のからだと運動 (配布資料) 10. 第16章：運動の調節 2(大脳皮質等運動野) 11. 第11章：筋収縮 1(収縮力の発揮機構) 12. 第11章：筋収縮 2(収縮のエネルギー獲得機構) 13. 第7章：代謝 1 (エネルギー代謝概要) 14. 第7章：代謝 2 (運動行動のエネルギー・効率) 15. 補足とまとめ
教科書	『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学第4版』/石澤光郎・富永淳執筆 医学書院
参考文献	PT・OT 必修シリーズ 消っして忘れない生理学要点整理ノート/佐々木誠一 羊土社
成績評価	後期試験による評価 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	解剖学実習
担 当 教 員	稲垣 忍、松田 淳子、松尾 高行、粕渕 賢志、松野 悟之、山野 宏章、 国宗 翔、荒木 智子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	1年次 後期 実験・実習
授 業 科 目 概 要	運動器系及び内臓系解剖学の講義で学習してきた系統解剖学的な知識を人体標本等の観察とスケッチ等によってさらに深めることを目的とする。特に、人体各器官の局所解剖学的な位置関係を中心に学習する。また、体表解剖として学生間で互いの皮膚表面から筋や骨を視診と触診によって確認し、形状や弾力性等を確かめる。
授 業 の 目 的	運動器系解剖学、内臓器系解剖学、神経解剖学においては、講義を聴講することによって人体の構造を機能との関連で理解することを目的としている。これに対して、本解剖学実習においては、組織標本、骨標本、人体模型、人体を用いて、具体的実態として人体の構造を理解する。また、人体の機能を組織構造との関連で理解する。
授 業 計 画	1. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-上肢1- 2. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-下肢1- 3. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-体幹・股関節1- 4. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-上肢2- 5. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-下肢2- 6. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習-体幹・股関節2- 7. 骨格標本・人体模型の観察と体表解剖実習 8. 細胞組織学実習 1A 軟骨・骨 9. 細胞組織学実習 1B 軟骨・骨 10. 細胞組織学実習 2A 粘膜上皮・外分泌腺・骨格筋 11. 細胞組織学実習 2B 粘膜上皮・外分泌腺・骨格筋 12. 細胞組織学実習 3A 肝臓・腎臓 13. 細胞組織学実習 3B 肝臓・腎臓 14. 細胞組織学実習 これまでの確認・総括 15. 系統解剖学実習(大阪大学医学部)
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学-専門基礎分野 解剖学 第4版』/医学書院/2015年 『運動療法のための機能解剖学的触診技術 下肢・体幹』(改定第2版)メジカルビュー社/2012年 『運動療法のための機能解剖学的触診技術 上肢』(改定第2版)メジカルビュー社/2012年
参 考 文 献	『プロメテウス解剖学アトラス』解剖学総論・運動器系(第2版)医学書院/2011年 『解剖学アトラス 第3版』/越智淳三(訳)/文光堂/1990年 組織細胞生物学 南江堂 ポケット組織学 リサ・リー著、西村書店 2018.3
成 績 評 価	複数のレポート、実習中の課題、実技・記述式試験などによって総合的に評価する。実習に関して、十分な予習と復習をすること。

科 目 名	運動学
担 当 教 員	粕 淵 賢 志
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	1年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	人間の身体運動に関する基礎知識を学ぶことを目的とする。これまでに学習した四肢や体幹の運動器を中心とした解剖学や生理学等の知識に基づき、姿勢・歩行等の動作、運動制御と運動学習、随意運動と反射運動等について身体運動を可能にしているメカニズムについて教授する。各論として①脊柱・体幹の機能、②肩甲骨・肩の機能、③肘と前腕の機能、④手と手指の機能、⑤骨盤と股関節の機能、⑥膝関節の機能、⑦足の機能等の身体各部の機能について学習する。
授 業 の 目 的	運動力学の基礎を理解し、運動学の基本知識を習得する。また、理学療法に必要な関節や筋の機能について運動学的観点から理解する。姿勢や歩行の基礎を学習し、動作分析の基本となる知識を習得する。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 関節・筋の構造と機能 2. 生体力学の基礎① 3. 生体力学の基礎② 4. 生体力学の基礎③ 5. 肩関節の運動学 6. 肘関節の運動学 7. 手関節の運動学 8. 股関節の運動学 9. 膝関節の運動学 10. 足関節の運動学 11. 体幹の運動学 12. 姿勢 13. 歩行① 14. 歩行② 15. 運動制御・運動学習・運動とエネルギー供給機構
教 科 書	『15 レクチャーシリーズ 理学療法・作業療法テキスト 運動学』/小島 悟編集/中山書店
参 考 文 献	『基礎運動学』/中村隆一 他著/医歯薬出版 『カパンジー機能解剖学』/塩田悦仁 監訳/医歯薬出版 『筋骨格系のキネシオロジー』/島田智明 監修/医歯薬出版
成 績 評 価	講義中の小テスト、後期試験を総合して評価する。 講義に関して、十分な予習と復習をすること。

科 目 名	生活支援学
担 当 教 員	濱岡 克伺
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	1年次 後期 講義
授業科目概要	生活支援に関連する学術領域としてリハビリテーション工学、福祉工学、支援工学などがあり、高齢者と障害者のための技術開発が、多くの学会と福祉実務者によって行われている。リハビリテーション工学は電子工学や機械工学等の工学的知識・技術をリハビリテーションに活用しようとする学問領域であり、疾病等によって失われた身体機能を補完・代行することで、障害を有する人の全人的な復権を図るプロセスの支援を目的としている。本講義では、障害を受けることで不自由になる生活内容や環境の変化を解説する。また、工学的手法を用いた車いす等の移動手段、義肢・補装具等の姿勢や動作の改善機器、住宅改造関連やコンピュータ・コミュニケーション等に関するリハビリテーション機器の原理や仕組み等について理解し、患者・障害者の在宅での日常生活環境を自立支援するための工学的手法を学習する。
授業の目的	少子高齢社会で理学療法を実践するにあたって当該分野の基礎的な知識の習得が求められている。異なる専門分野の職種が障害者・高齢者にかぎらず人々すべての幸せな人間関係を築くうえで連絡や協力をするために共通言語としての本講義での知識を持つことが求められる。福祉住環境コーディネーター3級のテキストも活用し、実践的な知識を効率的に習得する。介護予防についても概観する。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. リハビリテーション工学・生活支援工学の定義 2. わが国における「障害者」の定義 3. 暮らしやすい生活環境をめざして 4. 支援機器活用のポイント 5. 健康と自立をめざして ヘルスプロモーション 認知症予防 6. 日常生活動作の支援 自助具・義手・義足・装具・ロボットアーム 7. バリアフリーとユニバーサルデザイン アクセシブルデザイン 8. 姿勢保持・移乗の支援 スライディングボード リフト 9. 移動の支援 杖・歩行器・車椅子 10. コミュニケーション・機器操作・認知障害への支援 11. 安全・安心・快適な住まい 12. 人にやさしい生活環境 住環境 13. 人にやさしい生活環境 都市環境 14. 安心できる住生活とまちづくり 15. 高齢者の生活支援 障害者とバリアフリー まとめ
教科書	『生活支援工学概論』/日本生活支援工学会 日本リハビリテーション工学協会 共編/コロナ社/2013年
参考文献	『福祉住環境コーディネーター検定試験 3級公式テキスト 改訂5版』/東京商工会議所/2019年
成績評価	<ul style="list-style-type: none"> ・後期試験期間中に試験を実施(70点) ・平常点等(30点) ・平常点解説：レポート感想等。私語、教科書なしはその回分はゼロ点。 ・受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	感染対策
担 当 教 員	藤原 正昭
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	1年次 前期 講義
授業科目概要	理学療法士が従事する医療施設や福祉施設を想定した感染対策について学ぶ。注意すべき主な感染症と基本的な対策知識を具体的に紹介し、施設内の感染対策の体制を理解する。また、職員自身の健康管理と職員研修の必要性、日常的な衛生管理の方策等を理解し、施設実習の際の具体的な準備とする。さらに感染症の発生時の状況把握や拡大防止、行政機関との連携などについても紹介する。
授業の目的	季節性のある感染症に対しては、流行時期を知ることにより、有効な予防を行うことが可能となる。症状を知ることによって感染者の発見を容易にすることができる。そのうえでの確かな予防法を講じることが可能となる。以上のように感染症に対する理解を深め、感染症に対する正しい予防法をみにつける。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 感染対策の歴史。スタンダードプリコーション。 2. 感染経路別予防対策 3. 病原体の種類、日和見感染症 4. 結核について。 5. ウィルス感染症について。 6. HIV 感染症。 7. 針刺し事故、ウィルス性肝炎について。 8. 関連法規について。
教科書	『病院感染対策ガイドライン 2018年版』/じほう刊
参考文献	なし
成績評価	前期試験、授業態度等により総合的に評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	理学療法学概論
担 当 教 員	山野 宏章
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	1年次 前期 講義
授業科目概要	学生個々の入学志望理由を大切にしながら、理学療法士となる動機付けを行い、将来の目標を明確にすることを目的とする。理学療法士の法律制度、理学療法の対象疾患、評価の概要と治療手段、学問的体系化、理学療法と研究、理学療法の役割と職域、理学療法士としての適性、理学療法と心理的対応等、リハビリテーション医学・医療や地域における理学療法（士）の位置づけ、意味づけについて教授する。
授業の目的	理学療法の全体像と展開を構造的に理解することを通して、理学療法への興味・関心を高め、その後の学習へのスムーズで能率的な導入を図ること。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 理学療法とリハビリテーション 2. 理学療法の職域と労働対価 3. 職能団体と協働職種 4. 理学療法士の卒前・卒後教育と求められる能力 5. 日本と世界の理学療法の違い 6. 疾患と障害の分類 7. 急性期リハビリテーションにおける理学療法の役割とリスク管理 8. 回復期リハビリテーションにおける理学療法の役割と在宅復帰の関わり方 9. 生活期・地域リハビリテーションにおける理学療法の役割 10. 疾患別理学療法① 11. 疾患別理学療法② 12. 理学療法の実際 13. 理学療法の実際 14. 理学療法の実際 15. 理学療法の実際
教科書	『理学療法概論 第1版』庄本康治（編）/羊土社/2017年
参考文献	授業での配布資料
成績評価	前期試験及び小テストにより総合評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	運動療法学
担 当 教 員	神里 巖
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	1年次 後期 講義
授業科目概要	運動療法を適切に行うための基礎的な知識を習得することを目的とする。理学療法の中核に位置づけられている運動療法の概念についての理解を深め、運動器系解剖学、内臓系解剖学、運動器系生理学、内臓系生理学や運動学等の科目と関連付けながら、基礎的な運動療法について教授する。運動療法の対象疾患・障害、運動療法の適応と禁忌、リスク管理、運動の阻害因子、運動療法の目的と治療計画立案など基礎理論を学習する。
授業の目的	運動療法の対象となる病態を具体的に把握し、運動器や神経系疾患、内部障害など目的に合わせた運動手技について理解する。理学療法の基盤となる運動療法の基本手技を紹介し、その対象となる身体機能障害を理解する。また運動療法の注意点や禁忌、リスクを具体的に理解して、基礎となる運動療法手技の理論背景を理解する。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 運動療法の概要 2. 関節可動域制限の病態と運動療法 3. 筋力増強練習と運動療法 4. 運動制御 5. 運動と呼吸・循環 6. 運動と代謝 7. 持久力増強運動 8. 協調性運動
教科書	『第2版 運動療法学－障害別アプローチの理論と実際』/市橋則明 編集/文光堂/2014年
参考文献	『標準理学療法 運動療法学各論 第4版』/吉尾雅春 編集/医学書院/2017年
成績評価	後期試験 80%、小テスト 20%により総合評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	物理療法学
担 当 教 員	鶴崎 智史
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	1年次 後期 講義
授業科目概要	物理療法が及ぼす生体反応とその治療効果を学ぶことを目的とする。物理療法は温熱、音、光線、電気、牽引、徒手（マッサージを含む）等の物理的エネルギーを外部から身体の病体部分に適用し、痛みを和らげ、血液循環を改善し、リラクゼーションをはかるなどの目的で行われる治療法である。運動器系・内臓系解剖学、運動器系・内臓系生理学や物理学等の知識を関連付けながら物理療法の生体反応をまず学習し、温熱・寒冷療法、超音波療法、電気刺激療法、水治療法、牽引療法等の各種療法の目的、作用、適応と禁忌、実施方法と留意点を学ぶ。さらに、物理療法を行う際のリスク管理についても学習し理解する。
授業の目的	基礎物理学を理解することから物理的エネルギーを理学療法に応用できる能力を身につける。物理的エネルギーの身体への影響を知り、物理エネルギーが治療に応用できることと危険性を多く含んでいることを理解する。 知識の蓄積に終始するのではなく、臨床を支えるため基礎学問にまで理解を求める学習姿勢を身につけ、治療応用への科学的根拠を求めてほしい。応用性と柔軟性を持った自らの考えをもち、根拠のある治療展開ができるようになってほしい。また、物理療法機器の安全な取り扱い方を理解する。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 物理療法の定義、臨床的意義、概論 2. 温熱・寒冷療法に対する生体反応と影響 3. 物理療法のための病態生理① 4. 物理療法のための病態生理② 5. 電磁波・超音波エネルギーに対する生体反応と影響 6. 電気エネルギーに対する生体反応と影響 7. 力学エネルギーに対する生体反応と影響(牽引、水治療) 8. 総括
教科書	『物理療法学 改訂第2版』/松原 正 監修/金原出版/2012
参考文献	資料配布
成績評価	後期試験 90点、小テストの平均点10点 成績評価の詳細は第一回目の講義で発表。

科 目 名	理学療法評価学
担 当 教 員	国宗 翔
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	1年次 後期 講義
授業科目概要	理学療法の中核を占める障害の種類・程度を国際生活機能分類を基に、診断・評価について学ぶことを目標とする。理学療法での評価の意義、疾病と障害、障害分類の概念と構造等について教授する。また、理学療法での診断評価のすすめ方等、模擬症例を通して障害評価の進め方と障害構造について教授する。
授業の目的	理学療法士として理学療法評価学の意味を理解し、ICFにより障害構造を把握するとともに、理学療法の目標設定やプログラムの立案方法を学ぶことを目的とする。疾患の予習、問診、検査・測定方法の学習を通して、理学療法臨床推論を行い、目標設定や理学療法プログラム立案の動機づけとなるよう進める。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 総論（国際生活機能分類：ICF） 2. 評価の基礎と進め方医療面接と情報収集 3. 意識障害・全身状態の見方 4. 画像所見、脳神経 5. 高次脳機能、気分（うつ・不安）・思考の評価、意欲・自己効力感 6. 栄養状態の評価、フレイル、姿勢・形態測定 7. 感覚、痛み 8. 反射、筋緊張、ROM 9. MMT、姿勢バランス 10. 協調性、持久力 11. ADL 12. QOL、動作分析運動発達、内臓関連の評価 13. 理学療法臨床推論・統合と解釈 14. 目標設定と治療プログラムの立案 15. 総括
教科書	『リハビリテーション基礎評価学』/潮見泰蔵、下田信明編/羊土社/2020年
参考文献	『ICF 国際生活機能分類』/世界保健機構/中央法規出版/2008年 適宜資料を配布する。
成績評価	後期試験により評定する。十分な予習と復習をして授業を受講すること。

科 目 名	医学英語
担 当 教 員	仲渡 一美
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	最新の医療情報が必要な医療従事者にとって、英文の医学雑誌やウェブサイトなどから情報を収集する能力は重要である。本講義は、医学・医療に関連する基礎及び臨床分野の英語の学術論文を教材にして、読み方を学び、論文の要旨を理解し報告することができることを目標とする。そのために基礎や臨床分野の論文で多く用いられる医学用語についても教授する。
授 業 の 目 的	<ul style="list-style-type: none"> ・人体の主要な組織についての構造や機能を英語で学び身体用語を習得する。 ・現代医療に関する文献を読み、医療をめぐる問題について考える。 ・論文のアブストラクトなどを題材に医学論文の読み方を学ぶ。 ・医療現場でP Tが必要とするリハビリ用語や英語表現を身につける。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. The Human Body: What is the body made up? 会話：挨拶 2. The Human Body: Cell 医療文献/会話：痛む部位 3. The Human Body: Tissue, Organ and System 医療文献/会話：痛みの種類 4. The Human Body: Characteristics of Human Body 医療文献/会話：経過 5. The Human Body: Characteristics of Human Body 医療文献/会話：肢位 6. The Skelton System: Background Information 医療文献/会話：肢位指示 7. The Skelton System: Joint(articulation)医療文献/会話：バイタルサイン 8. How to Make a Presentation 9. The Skelton System: Joint(articulation)医療文献/会話：自動可動域 10. The Muscular System: Background Information 医療文献/会話：他動可動域 11. The Muscular System: Tendon 医療文献/会話：頸部可動域 12. The Muscular System: Ligament 医療文献/会話：筋力測定 13. The Muscular System: Movement 医療文献/会話：触覚検査 14. 英語論文の読み方 Presentation 準備 15. Presentation
教 科 書	『リハビリテーション英会話』 /三木貴弘・今本大地・岡谷内美乃里 著/ メジカルビュー社/2019年 第2刷
参 考 文 献	補助リーディング教材、参考文献は授業中にプリントを配布します。
成 績 評 価	後期試験60%と、小テスト、発表など授業への参加度40%を合わせて総合的に評価します。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	公衆衛生学
担 当 教 員	河野 公一、河野 令、横山 浩誉
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 講義
授業科目概要	学習の目標は、疾病を予防し、健康を保持し、人類としての身体的、精神的、社会的能力を最高度に発展させるための自然科学および社会医学原理を学び、実地に適応する科学、技術を学習することである。そのため、わが国の疾病構造の変遷を理解し、その要因の解明と対策についての予防医学的視点から広く学習し、さらに生活の場である地域社会における個人と集団の特性を公衆衛生学的手法により認識し将来理学療法士として必要な理論と技術を習得する。
授業の目的	健康、障害と疾病の概念を説明できる。 環境と健康・疾病との関係を概説できる。 産業保健を概説できる。 地域保健と医師の役割を説明できる。 感染症の予防、食品衛生について説明できる。 生活習慣に関連した疾病を列挙できる。 日本における社会保障・福祉制度を説明できる。 医療保険と公費医療や介護保険を説明できる。 疫学概念と疫学の諸指標について説明できる。 などを目的とする。
授業計画	1. 公衆衛生総論、環境保健 2. 公衆衛生総論、環境保健 3. 産業保健 4. 産業保健 5. 疫学・学校保健 6. 疫学・学校保健 7. 人口・保健統計、老人福祉 8. 人口・保健統計、老人福祉 9. 成人保健・地域保健 10. 成人保健・地域保健 11. 母子保健・口腔保健 12. 母子保健・口腔保健 13. 感染症・食品・栄養、国際保健・精神保健 14. 感染症・食品・栄養、国際保健・精神保健 15. 医療経済・障害者福祉
教科書	『医療・福祉系学生のための専門基礎科目』/河野 公一 編集代表/金芳堂
参考文献	適時紹介する
成績評価	後期試験による評価 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと

科 目 名	生命倫理
担 当 教 員	行岡 秀和、丸野 元彦、仙波 恵美子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 講義
授業科目概要	自分自身と他者の価値観を考え、医療従事者と患者との間にどのような関係を築いていくべきかを身につけることを目標とする。具体的には、臓器移植、人工授精、人工中絶、ターミナルケア、尊厳死、インフォームドコンセント、臨床研究などのさまざまな問題点について教授する。
授業の目的	生命倫理の諸問題に知識として触れるだけではなく、「自分自身も当事者になりうる」という意識を持ち、「何が問題であり、どうあるべきか」という容易には答えの出ないことを自分なりに考え続ける力を養うことを目的とする。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 生命倫理と医療、病名告知、インフォームドコンセント、自己決定権（行岡） 2. 患者の心理、全人的ケア（行岡） 3. 緩和ケア、ホスピスケア（行岡） 4. 安楽死と尊厳死（丸野） 5. 脳死と臓器移植（丸野） 6. 臨床と医療倫理（丸野） 7. 臨床研究における研究倫理とは何か（仙波） 8. トラウマ（心的外傷）とその回復支援（仙波）
教科書	特に指定せず、必要に応じて資料を配布する。 主にスライドや映像資料を用いて講義を行う。
参考文献	各回講義内容に合わせ、適宜、関連資料の配布や参考図書を紹介を行う。
成績評価	レポートと後期試験の成績によって評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	内臓系生理学
担 当 教 員	稲垣 忍
単 位、必 修・選 択	3 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	2 年 次 前 期 講 義
授 業 科 目 概 要	<p>生体の統合的理解のために内臓器の生理について学習することを目的とする。呼吸器系、循環器系、消化器系、泌尿器系、内分泌系それぞれの機能について講義する。具体的には、呼吸器系では、呼吸運動の制御、運動と換気の機序、ガス交換、肺気量分画などを、循環器系では、心周期と心拍出量の調整、体循環・肺循環、運動時の循環制御などを、消化器系では、消化と吸収、運動とエネルギー代謝などを、泌尿器系では、運動と腎機能、尿の生成などを、内分泌系ではホルモンによる様々な影響といった内容について教授する。</p>
授 業 の 目 的	<p>本講義においては、主要内臓生理機能である血液、循環系・呼吸系・泌尿系、消化・吸収系、生殖系、内分泌系などを中心にその基礎生理学を学習すると共に生命維持の基本的なメカニズムを理解する。</p>
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 生命現象と人体 細胞 2. 細胞と内部環境 細胞の構造 3. 細胞と内部環境 静止電位と活動電位 4. 血筋 骨格筋と心筋の興奮と収縮 5. 血液・免疫 6. 血液・免疫 7. 心臓と循環 8. 心臓と循環 9. 呼吸とガスの運搬 10. 呼吸とガスの運搬 11. 尿の生成 12. 消化と吸収 13. 内分泌 14. 生殖と発生 15. 補足とまとめ
教 科 書	<ol style="list-style-type: none"> 1. 『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学 第4版』/医学書院 2. 『PT・OT 基礎から学ぶ生理学ノート』 中島著 医歯薬出版
参 考 文 献	<p>『標準理学療法学・作業療法学-専門基礎分野 解剖学 第5版』/医学書院/2015年 『トートラ人体の構造と機能』 第5版 日本語版 丸善出版、 『イメージできる解剖生理学』 2860 メディカ出版</p>
成 績 評 価	<p>試験による評価 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。</p>

科 目 名	生理学実習
担 当 教 員	幸田 利敬、神里 巖
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 実験・実習
授業科目概要	本実習の目的は、運動器系及び内臓系生理学の講義で学習してきたことを生体で確認することである。運動器系では筋・神経系の反射運動、姿勢保持と姿勢反射、随意運動等を学生間で実習し確認する。循環器系では血圧の測定とその調節機能、呼吸器系では肺機能を測定し、運動による生理的变化等を理解する。また、それらの測定で用いる実験機器の取り扱い方やデータの処理やまとめ方を学習する。
授業の目的	生体の生理機能を実験的モデルを通して理解するとともに、その生理機能の動態を評価する方法を身につけることを目的とする。また、実験データの取り扱い方や生命倫理について考える機会を与え、科学的ものの見方、考え方の能力を高める。6グループに分かれ、各実習を2週にわたり行う。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション(前半) 2. 呼吸機能検査 3. 呼吸機能検査 4. 強さ時間曲線測定 5. 強さ時間曲線測定 6. 心電図 7. 心電図 8. まとめと発表、オリエンテーション(後半) 9. 筋電図 10. 筋電図 11. 呼気ガス分析装置を用いた代謝活動の分析 12. 呼気ガス分析装置を用いた代謝活動の分析 13. 等速性運動機器を用いた筋活動の観察 14. 等速性運動機器を用いた筋活動の観察 15. まとめと発表
教科書	各実習項目のマニュアルを作成して配布する。
参考文献	『新訂 生理学実習書』/日本生理学会教育委員会/南江堂
成績評価	各実習項目のレポートと実習実施内容により総合評価する。再試験は行わない。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	人間発達学
担 当 教 員	高井 範子
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	人間は生を受けてから死に至るまでの時間の経過に伴い心身共に変化していく存在である。本科目においては、理学療法に関連のある領域を含め、発達の諸理論をはじめとして、認知・情動・知的・心理的・身体的・社会的側面における人間の発達を生涯発達の観点から幅広く学修する。また、授業の一部において発達に関連するテーマを取り上げ、グループワークをも実施する。
授 業 の 目 的	本科目においては、生涯発達の観点から人間の変化を捉えていくが、理学療法領域に必要な知識を身につけると共に、自分自身の成長・発達を振り返り、授業で学んだ内容を患者理解や今後の人生に活用して行くことを目的とする。本科目での学びをとおして、患者様の人生の一端に関わる責任ある医療人として、自分自身がこれからの人生をどのような姿勢で生きていくのか、人生観、価値観的な側面からも各自の日々生きる姿勢を問い直す機会として頂きたい。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 人間の生涯発達とは、発達の諸理論Ⅰ（エリクソン、ブルーナー、その他） 2. 発達の諸理論Ⅱ：ピアジェの理論，認知機能の発達 3. 運動能力（乳児期の反射・反応を含む），言語・情動，知的機能の発達 4. 自己意識および心身の発達Ⅰ：幼児期・児童期 5. 自己意識および心身の発達Ⅱ：思春期・青年期 6. 成人期・高齢期のころと身体 7. 発達障がいについての理解 8. まとめ
教 科 書	毎回の授業においてプリント配布
参 考 文 献	『リハビリテーションのための人間発達学』大城昌平（編），メディカルプレス，2010. 『おうふう心理ライブラリー 発達心理学』，榎本博明（編），おうふう，2010.
成 績 評 価	前期試験（80%），授業時のコメントとレポート（20%）により総合的に評価する．受講にあたって、予習・復習を十分行うこと．

科 目 名	病理学
担 当 教 員	小仲 邦
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	人体の疾病の理解の基礎となる病理発症、進展転帰、病因等、疾病概念の本質を理解することを目的とする。病気になった人の身体に生じている病変、循環障害、退行変性、代謝異常、先天性異常、新生物（腫瘍）、炎症等の疾病がどうして起こるのかその原因を探り、その結果、人体の組織がどう変化しているのかを、個々の代表的な疾病と結びつけて教授する。
授 業 の 目 的	病気の本質を系統的に提示し、病気の成り立ちと症状をもたらす機序を解説する。知ること、理解することの楽しさとともに病理を把握し、臨床医学を学ぶうえで役立つようにすることが目標である。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 総論Ⅰ 病因、病理検査法・診断法 2. 総論Ⅱ 退行性病変、変性病変、代謝異常 3. 総論Ⅲ 循環障害、進行性病変 4. 総論Ⅳ 炎症、免疫、感染症 5. 総論Ⅴ 腫瘍 6. 総論Ⅵ 先天異常、老化 7. 各論Ⅰ 循環器 8. 各論Ⅱ 呼吸器 9. 各論Ⅲ 消化器Ⅰ 10. 各論Ⅳ 消化器Ⅱ 11. 各論Ⅴ 内分泌 12. 各論Ⅵ 泌尿器 13. 各論Ⅶ 生殖器 14. 各論Ⅷ 神経系、感覚器 15. 各論Ⅸ 運動器、皮膚
教 科 書	『わかりやすい病理学 改訂第6版』/岩田隆子 監修/南江堂/2016年
参 考 文 献	病理学コア画像（一般社団法人日本病理学会） http://pathology.or.jp/corepictures2010/index.html
成 績 評 価	受講態度、後期試験の成績を総合的に評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	臨床心理学
担 当 教 員	金井 桂子
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	臨床における心理学の立場から患者・障害者に対する正しい理解と接し方についての基礎的知識を学ぶことを目的とする。患者・障害者の一般的心理特性、適応・不適応と葛藤、防御機制、依存性、不安定性、抑うつ性、患者・障害者役割などを理解する。日々の臨床を進めるため共感、傾聴、障害受容といったカウンセリングの基本的技法やコミュニケーション技法を教授する。
授 業 の 目 的	患者により良いリハビリテーションを行うためには、先ず患者との間に信頼関係が構築できなければならない。また、患者のさまざまな心理的反応をどう捉えるのかにおいて、さらに医療スタッフ間や種々の人間関係においても臨床心理学の知見は不可欠である。本科目において、臨床心理学の基礎的理論や代表的な心理療法を学ぶことによって他者理解、患者理解、自己理解につなげることを目的とする。また、模擬の事例や医療面接ロールプレイングをとおして医療現場で役立つカウンセリングの基本的技法を身につけることをも目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 臨床心理学とは、オリエンテーション 2. 心のしくみとパーソナリティ 3. 心の発達段階（ライフサイクルの観点から） 4. 心理検査を知る①（質問紙法、作業検査、知能テスト） 5. 心理検査を知る②（投影法検査、精神発達検査） 6. 心理療法を知る①（フロイト精神分析、ユング心理学） 7. 心理療法を知る②（ロジャースのクライエント中心療法、森田療法、内観療法） 8. 心理療法を知る③（遊戯療法、芸術療法、箱庭療法） 9. 認知行動療法・論理療法、集団療法・家族療法 10. 社会と臨床心理学（病気と災害、ターミナルケア、心の健康） 11. 心の諸症状についての理解（患者・障がい者心理に対する理解） 12. 言語的・非言語的コミュニケーションとその面接態度 13. 医療現場で役立つカウンセリングの基本姿勢と技法・態度：医療面接ロールプレイング（傾聴・共感・受容）、カウンセリングの実際 14. 事例研究 15. ヒューマンエラー・まとめ
教 科 書	『はじめての臨床心理学』森田 寛之、竹松 志乃（編）北樹出版 2019 授業においてプリント配布
参 考 文 献	特になし
成 績 評 価	前期試験（60%）、授業中の課題、レポート、授業時のコメント・ロールプレイ参加度により総合的に評価する。幅広い臨床心理学の知識及び実習の参加度で評価します。

科 目 名	内科学
担 当 教 員	小 仲 邦
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	内科疾患の病態基礎及び臨床的知識(診断、検査、治療)を学ぶことを目標とする。具体的には、消化器疾患、内分泌疾患、腎・泌尿器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、代謝疾患等について病因、臨床症状、検査、診断、治療法、予後等を講義する。
授 業 の 目 的	疾患の成り立ちからはじめて、内科疾患の症候、診断、治療ならびに経過・予後を学習する。さらに、理学療法が臨床医学全体の中でどのような位置付けにあるか理解し、内科疾患と理学療法の係わりを学ぶ。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 臨床医学・内科学概論 2. 症状・徴候の意義 3. 環境要因に基づく疾患、中毒 4. 感染症 5. 免疫・アレルギー疾患、膠原病 6. 循環器疾患Ⅰ 7. 循環器疾患Ⅱ 8. 呼吸器疾患 9. 消化器疾患Ⅰ 10. 消化器疾患Ⅱ 11. 内分泌疾患 12. 代謝疾患 13. 腎・泌尿器疾患 14. 血液・造血器疾患 15. 神経・筋疾患
教 科 書	『メディカルスタッフのための内科学第4版』/伊藤進他編著/医学出版社/2013年
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	授業態度、後期試験の成績を総合して評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	整形外科学
担 当 教 員	森友 寿夫
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	整形外科疾患の基礎と臨床的知識を学ぶことを目標とする。具体的には、整形外科疾患（骨代謝・系統疾患、骨と関節の感染症、炎症性関節疾患、退行性・変性性関節疾患、骨端症・骨壊死、脊椎・脊髄疾患、骨軟部腫瘍、末梢神経障害、神経・筋疾患、先天性疾患等）の臨床例を取り上げ、病因、臨床症状、検査、診断、治療法、予後等を系統的に教授し、理解を深める。
授 業 の 目 的	先ず運動器の基礎の理解を深める。その中で骨・軟骨、筋肉、関節はそれぞれ独立したものでなく協調し、互いに影響し合いながら働くことを学ぶ。次に各分野毎にどのような疾患があるのか、その病因、病態、生理についての知識を得た上でどのように診断するのか、治療法としてどのような方法があるのかについて理解し、臨床的に活かしていくことを目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 整形外科総論 — 整形外科診断学 2. 整形外科総論 — 整形外科治療学 3. 整形外科各論 — 外傷学・骨折総論/創傷治癒 4. 整形外科各論 — 肩甲帯および肘の疾患 5. 整形外科各論 — 前腕、手関節の疾患 6. 整形外科各論 — 手の疾患 7. 整形外科各論 — 末梢神経損傷 8. 整形外科各論 — 頸椎の疾患 9. 整形外科各論 — 胸腰椎の疾患 10. 整形外科各論 — 骨盤および股関節の疾患 11. 整形外科各論 — 膝関節・スポーツ傷害 12. 整形外科各論 — 関節リウマチとその類縁疾患 13. 整形外科各論 — 足の疾患 14. 整形外科各論 — 先天性疾患、骨端症・骨壊死 15. 整形外科各論 — 骨・軟部腫瘍
教 科 書	『TEXT 整形外科学 改訂4版』（編者、出版社）/糸満盛憲（ほか）編集/南山堂
参 考 文 献	『整形外科 New MOOK 14、リウマチ類縁疾患』/越智隆弘、菊池臣一 編集/2004年 『図解 整形外科』改訂2版/久保俊一、山下敏彦ら編集/2012年/金芳堂 『図解で理解：基礎からレクチャー！整形外科疾患と看護』 /GARYA. SHANKMAN 原著・鈴木勝 監訳 『整形外科的理学療法、基礎と実践』；『骨・関節 X線写真の撮りかたと見かた』 第7版/堀尾重治/2007年/医学書院
成 績 評 価	後期試験で評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	神経内科学
担 当 教 員	小仲 邦
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授業科目概要	神経内科疾患の基礎と臨床的知識を学ぶことを目標とする。具体的には、神経内科疾患（先天異常、感染性疾患、代謝・中毒性疾患、末梢神経障害、変性疾患、脱髄性疾患、血管性疾患等）の臨床例を取り上げ、病因、臨床症状、検査、診断、治療、予後等の基本的な理解を深める。これら疾患がもたらす、末梢性麻痺、中枢性麻痺、筋萎縮、運動失調、錐体外路障害、知覚障害、構音障害、嚥下障害、高次脳神経機能障害などの症候、障害が生活活動能力に及ぼす影響について教授する。
授業の目的	神経内科学の症状と疾患の理解を深めることを目標とする。
授 業 計 画	1. 神経系の解剖と生理
	2. 神経学的診断法
	3. 意識障害、脳死、植物状態、頭痛、めまい、失神
	4. 運動麻痺、錐体路障害、筋萎縮、錐体外路障害、不随意運動、運動失調
	5. 感覚障害、嚥下障害、構音障害
	6. 脳血管障害、認知症、脳腫瘍、脳外傷、脊髄損傷
	7. 変性疾患、脱髄疾患、錐体外路疾患、末梢神経障害
	8. てんかん、筋疾患、感染性疾患、中毒、代謝性疾患、小児神経疾患
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学 神経内科学 第5版』/医学書院
参 考 文 献	『病気がみえる VOL7 脳・神経 第2版』/メディックメディア
成 績 評 価	前期試験、授業態度により評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	精神医学
担 当 教 員	鐘本 英輝
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授業科目概要	精神疾患の基礎と臨床的知識を学ぶことを目標とする。精神疾患（統合失調症、うつ病、器質性精神病、中毒性精神病、心因性精神病、神経症、精神発達障害、老年期の精神障害等）の臨床例を取り上げ、病因、臨床症状、検査、診断、治療、精神保健等基礎的な知識について教授する。
授業の目的	精神疾患の基礎と臨床的知識を学び、実臨床における精神疾患を罹患した患者への適切な対応を身につける。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 精神医学総論 1 2. 精神医学総論 2 3. 器質性精神障害 4. 症状性精神障害・物質関連精神障害 5. 統合失調症 6. 気分障害 7. 神経症性障害 8. パーソナリティ障害 9. 摂食・睡眠などの生理的障害 10. 精神遅滞・発達障害 11. リエゾン精神医学 12. リハビリテーション 13. 司法・福祉など 14. ライフサイクルと精神医学 15. まとめ
教科書	『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 精神医学 第4版』/上野武治 /医学書院/2015年
参考文献	『看護のための精神医学 第2版』/中井久夫、山口直彦/医学書院/2004年』
成績評価	前期試験（筆記試験）で評価 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	小児科学
担 当 教 員	仁科 昌久
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	小児疾患の基礎と臨床的知識を学ぶことを目標とする。小児疾患（先天異常と染色体異常、先天性代謝異常、新生児の生理と適応、低出生体重児、代謝異常と内分泌疾患、免疫・アレルギー性疾患、感染症及び呼吸器疾患、血液・腫瘍性疾患、消化器疾患、腎・泌尿器疾患、神経疾患、筋疾患等）の臨床例を取り上げ、病因、臨床症状、検査、診断、治療、予後等を教授する。小児の生活環境に及ぼす影響を含め、小児を全人的な観点からとらえていく。
授 業 の 目 的	医療のプロとして、世界に通用する必要な知識を習得することを目的とする。 小児科領域に関しては、何が重要なことかを認知していく事が求められる。 ※ 授業計画は状況に応じて予定を変える事もあります。
授 業 計 画	1. 小児科イントロダクション、小児科概論 (1) 2. 小児科概論 (2) 3. 小児生理学 (1) 4. 小児生理学 (2) 5. 小児生理学 (3) 6. 小児科感染症 (1) 7. 小児科感染症 (2) 8. 小児科先天性疾患・代謝疾患 (1) 9. 小児科先天性疾患・代謝疾患 (2) 10. 小児科 血液・腫瘍疾患 (1) 11. 小児科 血液・腫瘍疾患 (2) 12. 小児科 免疫・アレルギー疾患 13. 小児科 消化器疾患 14. 小児科 泌尿器疾患 15. 小児科 神経・筋疾患
教 科 書	『標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 小児科学 第5版』
参 考 文 献	特になし。
成 績 評 価	授業中の状態と前期試験の総合評価をします。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	脳神経外科学
担 当 教 員	丸野 元彦
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	脳神経外科疾患の基礎及び臨床的知識を学ぶことを目標とする。脳神経外科疾患（脳血管障害、頭部・脊髄外傷、脊椎疾患、神経系腫瘍・炎症等）の臨床例を取り上げ、病因、臨床症状、検査、診断、治療、予後等について教授する。神経系疾患の診断に必要な画像診断についても、解剖生理と臨床との関連が良く理解できるように解説する。
授 業 の 目 的	脳神経外科疾患の基礎および臨床的知識を学ぶことを目標とする。理学療法を実践する上で必要とされる脳神経外科領域の疾患の基本的な概念を学ぶ。症候、検査法、治療法および予後など疾患についての臨床知識を学ぶ。さらに、チーム医療の一員として他職種とのスムーズな連携を取れるよう学習を深める。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 総論：脳の構造と機能 2. 総論：中枢神経の機能と局在 3. 総論：脳神経検査（画像検査他） 4. 総論：症候（1） 脳に特異な症候と病態 5. 総論：症候（2） 認知症 6. 脳血管障害（1） 脳出血性疾患 7. 脳血管障害（2） 虚血性疾患 8. 脳腫瘍（1） 神経膠腫 他 9. 脳腫瘍（2） 髄膜腫 他 10. 脊髄・脊椎疾患 11. 頭部外傷 12. 先天奇形・水頭症・感染性疾患 13. 機能的外科・てんかん 14. がん・神経疾患のリハビリテーション（1） 15. がん・神経疾患のリハビリテーション（2）
教 科 書	『病気がみえる vol.7 脳・神経』/メディックメディア/2011年
参 考 文 献	『脳神経疾患ビジュアルブック 初版』/学研/2010年
成 績 評 価	前期試験（筆記試験）成績と授業態度と組み合わせて評価する。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	救急医学
担 当 教 員	行岡 秀和
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期 演習
授業科目概要	救急患者の各種の特殊病態を理解し、それらをもたらす疾患と各々の症状、必要な処置などの知識を習得して、将来医療に携わる者として救急医療に参加できるようになる。さらに、救急患者の緊急度を判断でき、プレホスピタルケアの重要性を理解して、事故発生時の一時救命処置の基本となる人工呼吸法、心マッサージ等の実施法を学習する。
授業の目的	救急患者は各種の傷病により、迅速な診断・治療を必要としている。このような患者の病態・症状・必要な処置を理解し、重症度・緊急度の判断ができることが重要であり、救急医療に参加できる基本的知識を得る。また、現在の救急医療体制、プレホスピタルケアについて理解する。さらに、突然の心肺停止患者に対して救急蘇生の基本となる人工呼吸法、心臓マッサージなどの実施法を学習する。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 生と死、死の判定、臓器移植、生命倫理 2. 心肺停止(原因・病態・予後) 3. 心肺蘇生法の理論と実際 4. 救急医療体制 5. プレホスピタルケア 6. 災害医療 7. 緊急度・重症度の判断と対応 8. 救急処置 9. 感染対策 10. 呼吸・循環障害 11. 意識障害・神経疾患 12. 消化器・代謝障害 13. 小児・妊婦の救急疾患 14. 外傷・熱傷 15. 異物・中毒・熱中症・低体温
教科書	『ICUのための呼吸理学療法』/丸川征四郎 編集/メディカ出版/2010年
参考文献	『救急医療カラーアトラス』/龍村俊樹 編集/医薬ジャーナル社/2001年 『ナースのための救急・集中治療』/坂田育弘 編集/メディカ出版/2006年 『外傷、熱傷患者の鎮痛・鎮静法』/行岡秀和/ICUとCCU 23(10)735-741/1999年 『病院外心停止後救命例の予後と問題点』/小玉忠知 他/蘇生 24(1)1-4/2005年 『病院前救護医療の現況』/石見拓 他/日本内科学会雑誌 95(12)18-23/2006年
成績評価	前期試験 80%、講義内課題レポート 20%を合わせて評定する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	薬理学
担 当 教 員	井上 都
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 選択
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授業科目概要	医療現場において薬物治療を行っている患者さんにかかわる際、薬物療法がリハビリに何等か影響を与えているか判断する知識を求められる機会は少なくはない。薬物の生体に対する作用に関する基本的知識を修得することを目的とする。
授業の目的	薬と生体との相互作用の結果起こる現象とその機構など、薬物療法の基礎となる薬理学を講義する。①一般的な薬物の知識を身につける、②よく使われる薬物の作用とその作用点および作用機序について理解できる、③一般的な薬物の体内動態について理解できる、④薬効に影響する因子について理解できる、⑤神経・筋疾患、精神疾患などの治療薬の作用機序および主作用と副作用について理解できる。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 薬について（分類、体内動態、主作用と副作用、相互作用） 2. 神経系に作用する薬 3. 呼吸器系、消化器系に作用する薬 4. 循環器系・血液に作用する薬 5. 炎症・免疫系に作用する薬、抗菌薬 6. 内分泌系に作用する薬 7. その他（泌尿器系、眼科領域など）に作用する薬、抗悪性腫瘍薬 8. リハビリに関係する薬
教科書	『いちばんやさしい薬理学』/木澤靖夫 監修/成美堂出版/2017年
参考文献	なし
成績評価	前期試験 100点満点、授業中の様子を考慮 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	臨床検査学
担 当 教 員	北條 達雄
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 選択
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授業科目概要	医療スタッフの一員として必要な知識として、臨床検査の臨床的意義を理解し応用能力を身につけることを目的とする。臨床現場で行われる各種臨床検査の測定原理、測定方法、検査値の解釈等について教授する。
授業の目的	理学療法は広い意味での臨床検査に基づいて実施される。理学療法の対象疾患が拡大しており、理学療法士自身が検査を基に病態を理解し、その場のリスクを判断する能力も求められる。講義では、各種臨床検査、検査値の意義を習得し、医療スタッフとしての知識と実践力を身につけることを目的とする。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 総論 1 (循環器・呼吸器) 2. 総論 2 (消化器・肝胆膵) 3. 総論 3 (感染症・血液・内分泌) 4. 総論 4 (腎・電解質) 5. 総論 5 (神経・免疫) 6. 総論 6 (代謝・染色体・遺伝子、他) 7. 形態検査・画像検査 8. 演習
教科書	『臨床医学総論/臨床検査医学総論』/奈良信雄、高木康、和田隆志 編/医歯薬出版株式会社/2016年
参考文献	『医学領域における臨床検査学入門』第4版/藤田保健衛生大学「臨床検査学入門」編集委員会 編著 KTC 中央出版 2018年
成績評価	受講成績、演習成績、前期試験により総合評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	スポーツ傷害学
担 当 教 員	史野 根生
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 選択
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授業科目概要	わが国におけるスポーツ人口の増加は目覚ましいものがある。現在では幼児から高齢者まで国民の大部分の人が何らかの形でスポーツを行っている。スポーツを行う人の体力や健康状態も様々で、不適当なスポーツ活動による結果、スポーツ傷害も増加している。スポーツ傷害への対策としては、第一に予防が重要であるが、不幸にして起こった傷害は早期に治療を行い、スポーツ活動に復帰できるようにすることが大切である。近年わが国のスポーツ医療界にあってはスポーツに関心を持つ理学療法士が数多く輩出し、自己研修に努めてきている。そのため、スポーツ傷害の成因、病態、診断、そしてスポーツ理学療法を含む治療体系に関する理論や技術を学習する。
授業の目的	スポーツ傷害の基礎（解剖、生体力学）、成因、病態、診断、そしてスポーツ理学療法を含む治療体系に関する理論や技術を学習する。スポーツ傷害学を身につけた理学療法士の育成を目指す。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. スポーツ傷害学総論 2. スポーツ傷害理解に必要な解剖学、生体力学 3. 各論：上肢1 4. 各論：上肢2 5. 各論：脊椎 6. 各論：下肢1 7. 各論：下肢2 8. スポーツ傷害 リハビリテーション
教科書	『スポーツ膝の臨床 第2版』/金原出版/2014
参考文献	なし
成績評価	前期試験による。

科 目 名	ペイン・リハビリテーション
担 当 教 員	仙波 恵美子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 選択
履修対象・形態	3年次 後期 講義
授業科目概要	痛みの発生メカニズム、急性痛と慢性痛、痛みが惹起する心理的变化などを学ぶことを目標とする。痛みは身体に警告を与える重要な感覚の一つであるが、痛みを抱える患者、特に慢性痛で病む患者では生活動作や運動において大きく関わり、生活の質 (QOL) を低下させる大きな要因となる。痛みを訴える患者に対し、運動機能や日常生活活動への回復を促すための治療についても教授する。
授業の目的	痛みの基礎的なメカニズムについて、解剖学・生理学・病理学・薬理学などの知識をもとに学習を深め、痛みが慢性化するメカニズム、すなわち、痛みに対する恐怖や不安が行動を回避させ痛みを慢性化させること（「恐怖回避モデル」）について理解する。さらに、日常生活での活動量を増やし、物事をポジティブに捉える姿勢(患者主動型医療)がペイン・リハビリテーションの基本であることを理解する。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 痛みとは何か？疼痛研究の歴史 2. 末梢で痛みを受容するメカニズム 3. 生理的な痛みと病的な痛み（炎症性疼痛・神経障害性疼痛） 4. 脊髄後角における痛みの伝達と修飾、痛覚伝達系 5. 痛みの中枢回路 I 痛みと情動の回路（前帯状回、島皮質、扁桃体） 6. 痛みの中枢回路 II 脳画像による解析 7. 下行性疼痛調節系、痛みが慢性化する脳メカニズム 8. 痛みの評価法、薬物療法 9. 慢性痛各論 I CRPS（複合性局所疼痛症候群） 10. 慢性痛各論 II 帯状疱疹後神経痛 11. 慢性痛各論 III 線維筋痛症、顎関節症 12. 慢性痛各論 IV 整形外科的な痛み（椎間板ヘルニア、脊柱管狭窄症） 13. 慢性痛各論 V 整形外科的な痛み（変形性膝関節症、五十肩） 14. 慢性痛に対する運動療法の効果とそのメカニズム 15. 痛みの性差について、まとめ：ペイン・リハビリテーションの実際
教科書	スライド(iPad 使用)および参考資料のコピーにより授業を進める。
参考文献	『ペインリハビリテーション入門』/沖田実・松原貴子（著）/三輪書店 『痛みの集学的診療：痛みの教育コアカリキュラム』/日本疼痛学会、痛みの教育コアカリキュラム編集委員会（編）/真興交易(株)医書出版部/2016年
成績評価	後期試験、レポートなどによって総合的に評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	老年期障害学
担 当 教 員	濱岡 克伺
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授業科目概要	<p>理学療法臨床の場では単に疾病の治療やケアのみならず、日常生活活動（ADL）や生活の質（QOL）の向上を視野に入れた包括的な医療が要求されている。本講義では、加齢に伴う身体変化の特性をはじめ、老年者の基本的動作能力の障害を起こす代表的な疾病に関する診断、治療、その経過などの知識を習得し、老年者に起こりうる運動外傷とその障害予防に関しての知識を深める。老年者に対して理学療法を行う場合、健康維持の方法と疾病に伴って起こりやすい合併症について述べる。さらに、社会的自立を促すための支援体制とその福祉・介護事業についても論ずる。</p> <p>①老年者を取り巻く社会について、日本の人口推移、死因、政策、経済面などを解説する。また、老年期の身体・社会生活機能の特徴及び代表的な運動器疾患について解説する。</p> <p>②老年期の代表的な内科疾患と合併症、生活習慣病や機能低下予防とリスクマネジメントについて解説する。</p> <p>③老年者に起こりうる運動外傷、運動器の障害の改善方法、生活習慣、老化に伴う機能低下予防、コミュニケーション手段などについて知識と技術を学習する。また、社会参加支援のための福祉・介護事業についても紹介する。</p>
授業の目的	老年者に対して理学療法を行う場合、健康維持の方法と疾病に伴って起こりやすい合併症や社会的自立を促すための支援体制とその福祉・介護事業についても理解する。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 加齢と老化 2. 高齢者へのアプローチ 3. 老年症候群① 4. 老年症候群② 5. 高齢者に多い疾患 6. 高齢者のリハビリ・退院支援 7. 高齢者の終末期医療 8. 総括
教科書	『標準理学療法学・作業療法学 老年学』/第4版/大内尉義 編/医学書院/2014年
参考文献	『老人のリハビリテーション』/第8版/福井罔彦 著/医学書院/2016年
成績評価	前期試験で評定する。十分な予習と復習をして授業を受講すること。

科 目 名	発達障害学
担 当 教 員	宇野 里砂
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	3年次 後期 講義
授業科目概要	心身の正常発達過程を理解した上で、その発達を妨げる様々な要因について解説する。特に胎生期、乳幼児期、学童期など、成長発達の各時期における異常発達の特徴を精神的、身体的な観点から学習し、それらの相互の関連性を理解する。また、発達障害の治療概念を講義し、発達障害児をもつ家族の心理面やその対応などについても講義する。
授業の目的	理学療法士として、障害がある子どもと家族を支援するために必要な基礎知識を習得する。多面的な知識を統合して思考する能力を高める。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 運動の発達 2. 認知の発達、社会性の発達 3. 言葉の発達、食べる機能の発達 4. 反射と反応 5. 発達評価 6. 脳性麻痺総論 7. 脳性麻痺各論（痙直型四肢麻痺） 8. 脳性麻痺各論（痙直型両麻痺） 9. 脳性麻痺各論（痙直型片麻痺・アテトーゼ型・失調型） 10. ダウン症候群 11. 二分脊椎 12. 筋ジストロフィー 13. 重症心身障害、子どもの呼吸障害 14. 自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、学習障害 15. 子どもと家族への支援・連携、小テスト
教 科 書	『小児科学 標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 第5版』/奈良勲・他（編）/医学書院/2018年
参 考 文 献	『小児リハビリテーション医学 第2版』/栗原まな/医歯薬出版/2015年 『やさしく学ぶからだの発達』/林万里（監修）/全国障害者問題研究会出版部/2011年 『やさしく学ぶからだの発達 <Part2>』/林万里（監修）/全国障害者問題研究会出版部/2015年
成 績 評 価	講義態度等（毎講義のコメントペーパー記述内容評価）60%、小テスト40% 受講にあたって、予習・復習を十分行い、発表や質問を積極的にすること。

科 目 名	リハビリテーション医学
担 当 教 員	大澤 傑
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期・後期 講義
授業科目概要	疾病や外傷等によって受けた身体・精神的障害を診断して適切な治療法によりその障害を軽減させ、代償的手段を用いて社会で生活できるようにするための医学について学ぶ。運動器疾患等を受けた患者の残存能力を評価し、運動機能傷害等により生じる二次的障害の軽減や代償手段について講義する。循環器や呼吸器等の内部疾患によって生じた障害に対して、その評価、治療手段、障害と疾患の予後について講義する。また、チームワーク医療について解説し、チームの構築や円滑な運営、チームに参加する医療専門職の役割について講義する。
授業の目的	本講義では対象となる脳・脊髄の損傷、神経・筋疾患、切断などに対する理解を深め、機能障害、能力低下、社会的不利、社会参加というリハビリテーション(リハ)医学的な観点で疾患を評価・治療することを学び、社会におけるリハ医療の意義を理解させる。さらに、予防医学としてのリハを考え、公衆衛生学的にも社会貢献できる為の基礎知識を身につける。
授業計画	<p>総論 1. リハビリテーション医学、医療の理念、障害、チーム医療</p> <p>2. 物理・作業・装具</p> <p>3. 自助具・地域リハ・職業リハ</p> <p>4. リスク管理、廃用、生理検査、画像、制度法律</p> <p>障害各論 5. 運動障害</p> <p>6. 内部障害・高次機能障害・心理</p> <p>7. 摂食・言語・視覚・排泄</p> <p>疾患各論 8. 脳血管障害・脳外科</p> <p>9. 脊髄損傷、腕神経叢</p> <p>10. 神経・筋・骨関節</p> <p>11. 循環器・呼吸器</p> <p>12. 腎・小児・スポーツ</p> <p>13. 末梢神経・切断・がん</p> <p>14. 高齢者・熱傷・障害者スポーツ</p> <p>15. その他</p>
教科書	『リハビリテーション医学』安保雅博監修/羊土社/2018年
参考文献	DeLisa's Physical Medicine and Rehabilitation 6 th Ed. Wolters Kluwer, 2020
成績評価	後期試験(筆記試験)と毎回の小テストおよび授業態度を総合的に判定する受講にあたって、教科書に従って進めるので予習・復習を十分行うこと

科 目 名	チーム医療学
担 当 教 員	中原 英子、栗田 剛寧、西田 斉二
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期 講義
授業科目概要	<p>臨床において治療に関わる多くの医療従事者のなかでも、リハビリテーションに関わる職種がそれぞれの立場から、チーム医療の役割と責務について講義し、意思疎通のとれたチームワークが患者主体の医療においてどのように貢献するかを具体的に学習する。</p> <p>①チーム医療のリーダーの立場から、チーム医療について解説し、その目的や役割を学ぶ。また医師の立場から、患者の権利を明確にし、インフォームドコンセント、他のスタッフへの指示や連携のとり方について事例を紹介して解説する。</p> <p>②理学療法士の立場から治療の段階的なアプローチ（病期別アプローチ）を踏まえて、リハビリテーションの他職種との連携、クリティカルパスやその運用について事例を紹介して解説する。</p> <p>③日常生活場面での治療や支援において、患者と関わる作業療法士、看護師の立場から事例を交えて紹介し、チーム医療における生活に即した支援について解説する。</p>
授業の目的	<p>医療技術の多様化、先鋭化に伴って、医療従事者の専門は多岐に分化してきた。複数の医療職が共働する事は常態化しているが、真の意味での「協同」が良質な医療サービスを提供するうえでの不可欠の要素である。</p> <p>真のチーム医療について、今日的意味、情報の公開、口頭や書面での記録・伝達の技術について理解を深めていく。また、聞き取りの演習や、作業療法士の役割を具体的に知ること、臨床実習に活用できる知識とする。</p>
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. チーム医療の意義と必要性（中原） 2. 患者を主体とした医療従事者に求められる責務（中原） 3. チーム医療における医師の役割（中原） 4. 理学療法士の専門性と役割（栗田） 5. リハビリテーション専門職にとってのチーム医療（西田） 6. 作業療法士の専門性と役割（西田） 7. 情報の共有と記録（栗田） 8. チーム医療におけるコミュニケーション・スキル（栗田）
教科書	『チーム医療論』/鷹野和美 編著/医歯薬出版/2002年
参考文献	講義内で適宜紹介する
成績評価	前期試験 80%、課題レポート 20%により総合評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	医療安全学
担 当 教 員	横山 浩誉
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 講義
授業科目概要	医療の現場はめまぐるしく変化するため、最も守らなければならない「安全」についての知識や技術が必要である。本講義では、医療は常に危険と隣り合わせであることを認識し、医療過誤や院内感染防止等の安全管理能力の向上に努めることを目標とする。インシデントやアクシデントを少しでも減らし、またヒヤリハットの体験をした場合には、専門職として速やかな対応、原因分析・評価等を行い、安全な医療を提供できるように学習する。
授業の目的	日本では、医療安全について厚生行政の一環として医療安全体制整備の取り組みが行われている。専門職の立場から医療安全についての基本的な知識と実践をケーススタディを交え学習することを目的とする。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 医療安全とリスクマネジメントの概念（歴史と動向） 2. 医療におけるリスクマネジメントの基本と方針 3. 医療事故のメカニズムとその対策 4. 効率的な医療安全管理 5. 医療事故に対する倫理と法的問題 6. 医療のリスクマネジメントのプロセスとその実践（リスクの分析） 7. ケーススタディ（起こりやすい医療事故とその対策） 8. 学習内容の振り返りと理解の確認
教科書	特に指定しない（資料配布予定）
参考文献	『医療安全とリスクマネジメント』/嶋森好子・任和子著/ヌーヴェルヒロカワ
成績評価	授業への参加状況（20%）および後期試験（80%） 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	運動療法学演習
担 当 教 員	神里 巖
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期 演習
授業科目概要	運動療法学で学習した基礎的な運動療法の目的、作用、適応と禁忌、実施方法と留意点を踏まえ、安全で効果的な運動療法を遂行する技術を習得することを目的とする。学生間で患者と治療者の役割を決め、主要な理学療法の対象疾患を想定して関節可動域運動、筋力増強運動、持久力増大運動、協調性改善運動、全身調整運動とリラクゼーション、神経生理学的アプローチ等の計画を立案し実施する。
授業の目的	運動療法は運動学や解剖学、生理学などを背景に理学療法士にとって必要不可欠な分野である。理学療法士は脳血管疾患や運動器疾患などの患者に対して病態や生活を把握し、適切な運動療法を行わなければならない。実施される運動療法には臨床での経験則に偏らず、経験とエビデンスを統合した効果的な運動療法が求められる。本講義では運動療法の定義や基礎知識、技術について概説し、臨床に即した運動療法の具体的方法について理解することを目的とする。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 運動療法の概念 2. 足関節・足部の運動療法（テーピング） 3. 基本的な運動療法（1） 4. 基本的な運動療法（2） 5. 肩関節と肩甲帯の運動療法 6. 肘関節と前腕の運動療法 7. 変形性関節症の運動療法（1） 8. 変形性関節症の運動療法（2） 9. 脊椎疾患の運動療法 10. 股関節の運動療法 11. 膝関節の運動療法 12. 足関節・足部の運動療法 13. 脳卒中の運動療法 14. 切断の運動療法 15. その他疾患の運動療法・補足
教科書	『局所と全身からアプローチする運動器の運動療法』/小柳磨毅・編/羊土社 /2017年
参考文献	適時紹介・配布する。
成績評価	前期試験（実技及び記述試験）、授業時の態度を加味して総合評価する。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	物理療法学演習
担 当 教 員	鶴崎 智史
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期 演習
授業科目概要	物理療法学で学習した各療法の目的、作用、適応と禁忌、実施方法と留意点を踏まえ、生体に対して安全に物理療法を施行する技術を習得することを目的とする。学生間で患者と治療者の役割を決め、主要な理学療法の対象疾患を想定して各種療法の計画を立案し実施する。実際に温熱・寒冷療法、超音波療法、電気刺激療法、水治療法、牽引療法等の各療法を施行して、どのような生理的变化が生じるかを体験学習する。物理療法機器の適切な取り扱いと管理方法についても学習する。
授業の目的	<p>物理的エネルギーを理学療法に応用できる能力を身につける。物理的エネルギーの身体への影響を知り、治療に応用できることと危険性を理解する。また、物理療法機器の安全な取り扱い方と適切な治療技術を養う。</p> <p>演習では、学生は物理療法を施行する側と受ける側の両方を体験することで、対象者の受ける感覚を感じ取る。</p> <p>紋きり型の知識蓄積に終始するのではなく、応用性と柔軟性を持った自らの考えをもち、根拠のある治療展開ができるようになってほしい。</p> <p>グループ実習を取り入れるので、積極的に学習を進め多くの体験をするようにして下さい。</p>
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション(演習方法、注意事項、物理療法概論 など) 2. 物理療法における臨床推論 3. 温熱療法(表在熱)の実際(適応と禁忌及びデモンストレーション等) 4. 温熱療法(深部熱)の実際(適応と禁忌及びデモンストレーション等) 5. 超音波療法の実際(適応と禁忌及びデモンストレーション等) 6. 電気刺激療法の実際①(適応と禁忌及びデモンストレーション等) 7. 電気刺激療法の実際②(適応と禁忌及びデモンストレーション等) 8. レーザーの実際(適応と禁忌及びデモンストレーション等) 9. 寒冷療法の実際(適応と禁忌及びデモンストレーション等) 10. 牽引療法の実際(適応と禁忌及びデモンストレーション等) 11.] 12.] グループで学習課題に取り組み、 13.] レポートを提出する。 14.] 15. 水治療法の演習(夏季に別途時間を設けて実施する)
教科書	『物理療法学 改訂第2版』/松原 正 監修/金原出版/2012
参考文献	適宜配布
成績評価	定期試験 70点、グループ課題 30点 成績評価の詳細は第一回目の講義で発表。

科 目 名	日常生活活動学
担 当 教 員	荒木 智子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 講義
授業科目概要	患者・障害者が日常生活を営むために必要な、食事、排泄、整容、更衣、入浴などの日常生活活動をはじめ、環境も含めた家事動作や移動動作に関して適切な能力障害評価と生活活動指導を行うための基礎的な知識を修得することを目的とする。さらに、脳血管障害、脊髄損傷、関節リウマチなど各疾患における機能障害と能力障害を理解し、日常生活活動の障害の概要とその評価、指導法や環境設定等に関して講義する。
授業の目的	<ol style="list-style-type: none"> 1. ADL の概念の発展を理解し、ADL の範囲と評価項目との関連を学ぶ。 2. ICF を軸に障害と理学療法の関わりを理解し、QOL を高める方法を学ぶ。 3. 基本動作を含む ADL 動作を運動学的にとらえ分析することを学ぶ。 4. ADL 評価の目的を理解し、主な ADL 評価法の概略を学ぶ。 5. 歩行補助具や車椅子の機能と適応を理解し、これらの基本的な指導法を学ぶ。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. ADL の概念と範囲 2. ADL と障害 3. ADL と QOL 4. ADL の運動学的分析 5. ADL 評価：Barthel Index 6. ADL 評価：FIM 7. ADL 支援する機器：自助具・日常生活用具・車椅子 8. 起居介助・トランスファーの方法・生活環境学
教科書	『日常生活活動学・生活環境学 第4版』/鶴見隆正 編集/医学書院/2009
参考文献	『動作分析 臨床活用講座 バイオメカニクスに基づき臨床推論の実践』/石井慎一郎/メディカルビュー社/2013年
成績評価	講義中の課題と小テスト・後期試験を総合して評価する。授業に際しては、十分な予習と復習をすること

科 目 名	日常生活活動学演習
担 当 教 員	荒木 智子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 演習
授業科目概要	日常生活活動学で学んだことを基に実技を通して、対象者の日常生活・環境を分析・評価し、生活動作の自立にむけた実践的な理学療法及び指導等について学ぶことを目的とする。本演習では、学生間で患者と治療者の役割を決め、主要な理学療法の対象疾患を想定して、食事、排泄、入浴、更衣や整容動作のほか家事動作や移動動作等の能力障害評価や各動作の訓練方法、効率的な介助方法等を実技により教授する。
授業の目的	本授業の目的は、①代表的な日常生活活動の評価法を学び実践する、②日常生活活動学での知識を基に、障がい別に日常生活活動や生活関連動作の評価や動作指導、介助方法等を体験を通して学ぶ、③事例検討を通して、さらに日常生活活動や生活環境の評価や分析、動作指導や介助方法等の学びを深める、ことである。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 総論：オリエンテーション 2. ポジショニング，歩行補助具，車椅子演習① 3. ポジショニング，歩行補助具，車椅子演習② 4. ADL指導の実際：片麻痺① 5. 演習：片麻痺② 6. 演習：片麻痺③ 7. ADL指導の実際：脊髄損傷① 8. 演習：脊髄損傷② 9. 演習：脊髄損傷③ 10. ADL指導の実際：高齢者① 11. 演習：高齢者② 12. ADL指導の実際：各疾患の障害構造の把握と介入方法の検討① 13. 各疾患の障害構造の把握と介入方法の検討② 14. 各疾患の障害構造の把握と介入方法の検討③ 15. 総括
教科書	『ADL』/第1版/柴喜崇 編/羊土社/2015
参考文献	『福祉住環境コーディネーター検定試験 2級公式テキスト』/改訂4版/東京商工会議所 編/2016
成績評価	前期試験と課題レポートで評定する。授業に際しては十分な予習と復習をすること

科 目 名	運動器障害評価法 I
担 当 教 員	松野 悟之
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1 単位 必修
履 修 対 象 ・ 形 態	2 年次 前期 演習
授 業 科 目 概 要	骨格系障害の評価の理論と技術を学ぶことを目的とする。患者・障害者において骨と関節の機能が何の成因で障害されているか、その問題点を捉えるために骨格系の障害を評価し、検討し、理学療法プログラムを設定する必要がある。理学療法における骨格系運動機能評価の位置づけ、運動機能評価の過程、上肢、下肢、体幹の形態測定（四肢長、周計測定）、変形・拘縮に起因する異常アライメントの検査、関節可動域測定などの意義とその方法について教授する。
授 業 の 目 的	機能評価の基本となる機能解剖を踏まえた上で、正常者の評価をおこない、さらに骨格系の障害に対する具体的評価法を学ぶ。上肢、下肢、体幹の全体的形態測定（四肢長、周計測定）、変形・拘縮に起因する異常なアライメントや関節可動域測定などの意義を合わせて学ぶ。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 評価の意義 2. 形態測定（四肢長） 3. 形態測定（周径） 4. アライメントの評価 5. 関節可動域（ROM）測定 6. 肩関節の評価 7. 肩関節・肩甲帯の評価 8. 肘関節・手関節の評価 9. 体幹の評価 10. 股関節の評価 11. 膝関節・足関節の評価 12. 関節可動域制限について 13. 関節可動域制限について 14. まとめ・これまでの総括、実技試験における確認事項 15. まとめ・これまでの総括、実技試験における確認事項
教 科 書	『15 レクチャーシリーズ 理学療法テキスト 理学療法評価学 I』/石川朗 他編/ 中山書店 『PT・OT のための測定評価 DVD シリーズ 1 ROM 測定 第 2 版』/伊藤俊一 他編/ 三輪書店
参 考 文 献	『標準理学療法学専門分野 理学療法評価学』/内山靖 編/医学書院
成 績 評 価	前期試験と実技試験、レポートを総合して評価する。 講義に関して、十分な予習と復習をすること。

科 目 名	運動器障害評価法Ⅱ
担 当 教 員	山野 宏章
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期 演習
授業科目概要	筋系障害の評価の理論と技術を学ぶことを目的とする。理学療法の対象者の多くは疾病や外傷によって筋機能が低下し、日常生活活動に制限を受ける。筋を働かせないと、筋は小さくなり、廃用性筋萎縮を起こす。理学療法における筋系の運動機能評価の位置づけ、筋系運動機能評価の過程、上肢・下肢・体幹の筋力検査、筋持久力検査、機器を用いた筋機能測定等の意義とその方法について教授する。筋系障害に対する筋機能評価方法（触診、視診、筋力検査、筋持久力検査、筋電図、柔軟性等）の理論と技術等について教授する。
授業の目的	理学療法における筋系障害の評価の理論と技術を学ぶことを目的とする。筋力低下のメカニズムを理解し、筋系の運動機能評価の位置づけ、評価の方法を講義、演習にて理解し筋系障害に対する一連の評価の流れを習得する。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 筋力検査の基礎 2. 徒手筋力検査（肩甲骨の運動） 3. 徒手筋力検査（肩関節の運動） 4. 徒手筋力検査（肘関節・前腕の運動） 5. 徒手筋力検査（手関節・手指の運動） 6. 徒手筋力検査（上肢まとめ） 7. 徒手筋力検査（股関節の運動） 8. 徒手筋力検査（膝関節の運動） 9. 徒手筋力検査（足関節・足趾の運動） 10. 徒手筋力検査（下肢まとめ） 11. 徒手筋力検査（頭頸部の運動） 12. 徒手筋力検査（体幹の運動） 13. 機器を用いた筋力検査 14. 機能テスト・筋の柔軟性評価 15. 徒手筋力検査（全体のまとめ）
教科書	『新 徒手検査法 原著第9版』協同医書出版社/2014年
参考文献	『リハビリテーション基礎評価学』/潮見泰蔵, 下田信明編/羊土社/2020年
成績評価	前期試験（筆記試験および実技試験）、各演習の小テスト（口頭試問および実技試験）および発表（実演）により総合評価する。なお、演習に関して十分な予習と復習をすること。

科 目 名	神経障害評価法
担 当 教 員	濱岡 克伺
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 後期 演習
授業科目概要	<p>神経系障害の評価の理論と技術を学ぶことを目的とする。中枢神経系及び末梢神経系の病変に起因する障害構造の質的変化を把握するために必要な検査及び評価の目的、原理、方法、記録などについて学習する。①神経系の障害によりもたらされる問題点の中でも意識や感覚機能を中心に障害像を具体的に示し、そのとらえ方を解説する。</p> <p>②神経系の機能障害や不調和から生じる運動機能の問題点に対して、協調運動、体勢反射、姿勢反射などの観点から障害像を捉える評価について解説する。</p>
授業の目的	<p>随意運動発現のメカニズムについて理解できる。</p> <p>中枢神経疾患の種類と病態について理解できる。</p> <p>中枢神経疾患の検査の目的を理解・説明できる。</p> <p>中枢神経疾患の検査を、模擬患者を対象に実施できる。</p> <p>検査の結果をもとに、問題点を抽出し解釈できる。</p>
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 神経系障害の評価の目的と進め方 2. 反射の検査①(随意運動発現のメカニズムと反射機構、深部反射) 3. 反射の検査②(反射の意義と鑑別、表在反射・病的反射) 4. 感覚検査①(体性感覚野の機能と感覚系の伝導路、表在感覚の検査) 5. 感覚検査②(感覚検査の意義と鑑別、深部・複合感覚の検査) 6. 筋緊張の検査(痙縮の発現機序、静止時筋緊張・動作時筋緊張の検査他) 7. 運動麻痺の評価(片麻痺の回復過程とその評価, Brunnstrom recovery stage test) 8. 運動失調と協調性の検査(小脳の統御回路、運動失調とその分類、協調運動機能検査) 9. 姿勢反射の検査(姿勢の中枢制御と異常姿勢反射、立ち直り反応と平衡反応の検査) 10. バランステスト(BBT, FRT, TUG, 10m 歩行) 11. 神経系の画像評価 12. 脳神経の検査 13. 意識・認知症の検査(意識障害・認知症の概念、3-3-9 度方式・知能の検査) 14. 高次脳機能の検査(失語・失行の概念、半側空間無視・Pusher 症候群他) 15. 脳卒中総合評価法(SIAS, Fugl-Meyer 法)
教科書	『ベットサイドの神経の診かた 第18版』/田崎義昭、斎藤佳雄 著/南山堂/2016
参考文献	<p>『病気がみえる 脳・神経』/医療情報科学研究所/メディックメディア/2012</p> <p>『脳血管障害片麻痺に対する理学療法評価』(第2版)/鈴木俊明 監修/神陵文庫/2017</p>
成績評価	<p>講義中の実習状況と小テスト・後期試験(実技試験と筆記試験)を総合して評価する。</p> <p>受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。</p>

科 目 名	内部障害評価法
担 当 教 員	井坂 昌明、石川 みづき
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 演習
授業科目概要	呼吸器疾患の評価の理論と技術を学ぶことを目的とする。呼吸器機能、呼吸器疾患の障害構造を把握するために必要な検査及び評価の目的、原理、方法、記録などについて学習する。肺気腫等の呼吸器疾患に対する評価（呼吸機能検査、呼気ガス分析、酸素飽和度等）の理論と技術について教授する。心筋梗塞等の心・循環器疾患や糖尿病等の代謝疾患等の評価理論と技術を学ぶことを目的とする。心・循環器機能、代謝機能の障害構造を把握するために必要な検査及び評価の目的、原理、方法、技術、記録などについて教授する。具体的には、脈拍、血圧、心電図、体温、血糖、運動負荷試験等について学習をすすめる。
授業の目的	内部障害に関する基本的な評価を学び、各病態の評価における理解を目的とする。そして、フィジカルアセスメント及びバイタルサインの評価については、適切に実施し、評価の意義を理解することを目標とする。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 循環器（心臓）の理解と主な心疾患の病態 2. 循環器（血管）の理解と主な心疾患の病態 3. 循環機能を診る 4. 呼吸器の理解と主な呼吸器疾患の病態 5. 呼吸機能を診る 6. 胸部画像を診る 7. バイタルサインを診る① 8. バイタルサインを診る② 9. フィジカルアセスメント（視診・触診）① 10. フィジカルアセスメント（視診・触診）② 11. フィジカルアセスメント（打診・聴診）① 12. フィジカルアセスメント（打診・聴診）② 13. 代謝疾患の理解と主な疾患（糖尿病等）の病態 14. 悪性腫瘍の病態理解 15. 高齢者における病態
教科書	『リハビリテーション基礎評価学』/潮見泰藏 下田信明 編集/羊土社/2015年 『PT・OT ビジュアルテキスト 内部障害理学療法学』松尾善美 編集/羊土社/2016年
参考文献	『理学療法テキスト 内部障害理学療法学 循環・代謝 第2版』/木村雅彦 編集/中山書店/2017年 『理学療法テキスト 内部障害理学療法学 呼吸 第2版』/木村雅彦 編集/中山書店/2017年
成績評価	前期試験、課題レポート、出席、授業態度等から総合的に評価する。受講にあたって、予習復習を必ず行うこと。

科 目 名	臨床運動学演習
担 当 教 員	国宗 翔
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	2年次 前期 演習
授業科目概要	運動学等の基礎知識を臨床的に応用することを目的とする。患者・障害者の関節可動域障害、筋機能障害、神経筋機能障害の諸現象の問題点を解剖学、生理学、運動学などの知識を前提として臨床医学と関連させて評価・分析する方法を教授する。また、姿勢や歩行、種々の生活動作での変化の特徴やその原因を考察できるように学習する。臨床運動学の理解によつて的確な運動療法の治療計画と実施の能力を身につける。
授業の目的	人間の基本的動作である寝返り、起き上がり、立ち上がり、歩行について形態学的、運動学的、生体力学的な視点から観察・分析方法を習得し、臨床実習で担当する対象者の方が安全で有利な動作を選択できるよう基本を学んでいく。また、対象者の問題点抽出や治療計画立案までの思考過程を明らかにする手段として、疾患別の特徴的な姿勢や動作の観察・分析方法を学ぶ。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 生体力学の基礎 2. 姿勢の評価と分析① 3. 姿勢の評価と分析② 4. 寝返り 5. 起き上がり、床からの立ち上がり 6. 椅子からの立ち上がり 7. 歩行① 8. 歩行② 9. 歩行の異常 10. 計測装置による分析①（三次元動作解析、床反力計） 11. 計測装置による分析②（三次元動作解析、床反力計） 12. 高齢者の姿勢・動作分析 13. 変形性股関節症・膝関節症患者の姿勢・動作分析 14. 脳卒中片麻痺患者の姿勢・動作分析 15. 運動失調症・パーキンソニズムの姿勢・動作分析
教科書	『観察による歩行分析』/医学書院/2005年 『15 レクチャーシリーズ 臨床運動学』/中山書店/2015年
参考文献	『姿勢と歩行 協調からひも解く』/樋口貴広・建内宏重/三輪書店/2015年 『動作分析 臨床活用講座』メジカルビュー/石井慎一郎/2013年 適宜必要な文献及び資料などを配布する。
成績評価	課題レポート、前期試験により総合評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	運動器障害理学療法
担 当 教 員	粕 淵 賢 志
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	3 年 次 前 期 講 義
授 業 科 目 概 要	脊椎および上肢・下肢等の骨・関節系障害の基礎的知識を得たうえで、骨・関節系の障害に対する理学療法を学ぶことを目的とする。脊椎の疾患（変形性脊椎症、椎間板ヘルニア、筋・筋膜性腰痛症、側彎症）、上肢の骨・関節疾患（骨折、慢性関節リウマチ、切断等）、下肢の骨・関節疾患（骨折、変形性股関節症、変形性膝関節症等）について、機能評価（関節可動域テスト、筋力テスト、日常生活活動検査等）、理学療法のプログラム設定と治療の実際について教授する。
授 業 の 目 的	基本的な運動器疾患に関する基礎知識を学び、疾患の病態を理解する。また、具体的なプログラムの実施のために、病態を考慮した運動器の評価法と治療法の理解を目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 運動器障害の基礎知識 2. 変形性股関節症の理学療法 3. 変形性膝関節症の理学療法 4. 大腿骨頸部骨折の理学療法 5. その他の下肢骨折の理学療法 6. 腰部疾患の理学療法 7. 関節リウマチ・頸椎疾患の理学療法 8. 膝靭帯損傷の理学療法
教 科 書	『運動器障害理学療法学 改訂第2版』/細田多穂 監修/南江堂
参 考 文 献	『局所と全身からアプローチする 運動器の運動療法』/小柳磨毅・他 編集/羊土社 『運動機能障害の「なぜ？」がわかる評価戦略』/工藤慎太郎 編集/医学書院
成 績 評 価	前期試験により評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	運動器障害理学療法演習
担 当 教 員	粕 淵 賢 志
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	3 年 次 前 期 演 習
授 業 科 目 概 要	運動器障害理学療法で学んだことを基に実技を通して、対象者の運動器障害を分析・評価し、実践的な理学療法及び指導等について学ぶことを目的とする。本演習では、学生間で患者と治療者の役割を決め、主要な理学療法の対象疾患を想定して、機能評価（関節可動域テスト、筋力テスト、日常生活活動検査等）、治療を実技により教授する。
授 業 の 目 的	脊椎および上肢・下肢等の運動器障害の基礎的知識を理解する。そのうえで、上記疾患等に対する機能評価が可能となり、疾患の病態を把握できるようになる。さらに、代表的な運動器の疾患については、理学療法をおこなう上での評価項目の立案やプログラムを設定し、一定の評価・治療法が実践できることを目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 運動器障害の評価と治療 2. 変形性股関節症の評価と治療 3. 変形性膝関節症の評価と治療 4. 大腿骨頸部骨折の評価と治療 5. その他の下肢骨折の評価と治療 6. 腰椎椎間板ヘルニア、腰部脊柱管狭窄症の評価と治療 7. 腰痛の評価と治療 8. 手関節疾患の評価と治療 9. 肘関節疾患の評価と治療 10. 肩関節周囲炎の評価と治療 11. 腱板損傷の評価と治療 12. 肩関節疾患の評価と治療 13. 足部疾患の評価と治療 14. 膝靭帯損傷の評価と治療 15. 運動器疾患に対する評価項目、治療プログラムの立案
教 科 書	『運動器障害理学療法学 改訂第2版』/細田多穂 監修/南江堂
参 考 文 献	『局所と全身からアプローチする 運動器の運動療法』/小柳磨毅・他 編集/羊土社 『運動機能障害の「なぜ？」がわかる評価戦略』/工藤慎太郎 編集/医学書院
成 績 評 価	前期試験・実技試験により総合評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	脳機能障害理学療法
担 当 教 員	松田 淳子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授業科目概要	<p>脳腫瘍や頭部外傷等の様々な脳障害の中で、理学療法の対象として頻度の高い脳血管障害に起因する片麻痺を中心に障害の評価と理学療法の基本的な治療方法について学ぶことを目的とする。</p> <p>①脳血管障害に関する基本的な知識、片麻痺の評価（身体機能・高次脳機能・ADLとQOL）について、その意義を含めて講義する。</p> <p>②片麻痺の理学療法（運動療法・装具療法・発症後の各時期に合わせたアプローチ・二次障害の予防と対処）、片麻痺の予後等を学習し、系統的な理学療法が実践できるよう教授する。</p>
授業の目的	<p>1. 理学療法士が関わる脳機能障害の病態を理解する</p> <p>2. 対象者の障害を理解し、可能性を探れるようになるために、</p> <p>①脳のシステムを復習する</p> <p>②基本的な脳画像の見方を学ぶ</p> <p>③回復過程と回復に必要な関わりを学ぶ</p>
授業計画	<p>1. 脳機能障害の定義と病態～脳血管障害～</p> <p>2. 脳機能障害の定義と病態～脳外傷など～</p> <p>3. 脳機能障害の画像をみるために～基本的な解剖の復習～</p> <p>4. 脳機能障害の画像をみるために～臨床でよく出会う画像を学ぶ～</p> <p>5. 患者さんを理解するために脳のシステムを復習する</p> <p>6. 患者さんを理解するために脳のシステムを知る</p> <p>7. 脳機能障害の回復過程</p> <p>8. 脳機能障害の回復を促す関わり</p> <p>*順番はもう一つの講義との関係で変わることがあります。</p>
教科書	『脳卒中理学療法の理論と技術第3版』/原寛美, 吉尾雅春編/メジカルビュー
参考文献	『15 レクチャーシリーズ神経障害理学療法学Ⅰ』/大畑光司, 玉木彰編/中山書店 『病気が見える vol.1.7 脳・神経 第2版』/メディックメディア その他、講義内で随時紹介します。
成績評価	講義内で行う小テスト、前期試験、講義内課題等で判定します。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	脳機能障害理学療法演習
担 当 教 員	松田 淳子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 演習
授業科目概要	脳機能障害理学療法で学んだことを基に実技を通して、対象者の脳機能障害を分析・評価し、実践的な理学療法及び指導等について学ぶことを目的とする。本演習では、学生間で患者と治療者の役割を決め、脳血管障害に起因する片麻痺を想定して、機能評価（身体機能・高次脳機能・ADLとQOL等）、治療（運動療法・装具療法・発症後の各時期に合わせたアプローチ・二次障害の予防と対処）を実技により教授する。
授業の目的	<ol style="list-style-type: none"> 1. 脳機能障害に起因する障害を理解する 2. 脳機能障害を有する対象者を評価できるようになる 3. 脳機能障害を有する方のリスク管理を理解する 3. 脳機能障害を有する対象者に対する運動療法を知る 4. 脳機能障害を有する対象者に合併しやすい症状と理学療法を知る
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 脳機能障害の一次性 impairments と二次性 impairments 2. 脳機能障害の評価（運動機能評価と総合評価） 3. 脳機能障害の評価（バランス評価と歩行評価） 4. 脳機能障害の評価（基本動作とADL） 5. その他の評価（評価学の復習を兼ねて） 6. 脳機能障害の病態とリスク管理 7. 急性期の理学療法 8. 脳機能障害者の理学療法に必要な歩行補助具と補装具の理解 9. 脳機能障害者に対する立位・歩行練習～意義と方法～ 10. 脳機能障害者に対する課題志向型アプローチと運動学習の進め方 11. 高次脳機能障害と理学療法士のかかわり（1） 12. 高次脳機能障害と理学療法士のかかわり（2） 13. 脳機能障害における合併症と理学療法 14. 症例から学ぶ 15. 症例から学ぶ
教科書	『脳卒中理学療法の理論と技術第3版』/原寛美, 吉尾雅春編/メジカルビュー
参考文献	『標準理学療法学 神経理学療法学第2版』 『ここがポイント！脳卒中の理学療法/河村廣幸編/金原出版』 『標準理学療法学 運動療法総論第4版』/医学書院 その他、随時講義内に紹介します。
成績評価	講義内で行う小テスト、前期試験、講義内課題等で判定します。受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	内部障害理学療法
担 当 教 員	井坂 昌明
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	呼吸器疾患の病態と症状、呼吸器障害の機能評価、運動機能評価、理学療法プログラムと理学療法技術について習得することを目標とする。呼吸障害に対する理学療法について、その特徴と運動機能との関連及びリスク管理について解説する。代表的な循環器及び代謝障害の病態と症状、機能評価、運動機能評価、理学療法プログラムと理学療法技術について習得することを目標とする。循環障害、代謝障害による運動機能の障害について解説し、理学療法の概略を解説する。また運動療法を進めるにあたり、内部障害によるリスク管理について解説をする。
授 業 の 目 的	主な内部障害疾患に関する基礎知識を学び、各疾患特性に応じた理学療法の理解を目的とする。 内部障害に対する理学療法について、その特徴及びリスク管理についての意義を理解することを目標とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 心疾患（心筋梗塞、心不全等）の理解① 2. 心疾患（心筋梗塞、心不全等）の理解② 3. 心疾患（大動脈、末梢動脈等）の理解① 4. 心疾患（大動脈、末梢動脈等）の理解② 5. 呼吸器疾患（閉塞性・拘束性・外科術後）の理解① 6. 呼吸器疾患（閉塞性・拘束性・外科術後）の理解② 7. 代謝疾患の理解と主な疾患（糖尿病等）の理解① 8. 代謝疾患の理解と主な疾患（糖尿病等）の理解② <p>順番はもう一つの講義（内部障害理学療法演習）との関係で変わることがあります。</p>
教 科 書	『呼吸・心臓リハビリテーション』/高橋哲也、間瀬教史編著/羊土社/2013年 『内部障害リハのための胸部・腹部画像読影のすすめ』美津島 隆、山内克哉監修/メジカルビュー社/2017年
参 考 文 献	『理学療法診療ガイドライン』日本理学療法士協会 編/株ガイアブックス/2015年 『初学者のための呼吸理学療法テキスト』/堀竜次 編集/メディカ出版/2010年
成 績 評 価	後期試験、課題レポート、出席、授業態度等から総合的に評価する。 受講にあたって、予習復習を必ず行うこと。

科 目 名	内部障害理学療法演習
担 当 教 員	井坂 昌明、石川 みづき
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 後期 演習
授業科目概要	内部障害理学療法で学んだことを基に実技を通して、対象者の内部障害を分析・評価し、実践的な理学療法及び指導等について学ぶことを目的とする。本演習では、学生間で患者と治療者の役割を決め、主要な理学療法の対象疾患を想定して、機能評価、運動機能評価、治療を実技により教授する。
授業の目的	内部障害における基礎知識を学び、各疾患に応じた理学療法を理解し、リスク管理のもと適切な運動処方ができることを目的とする。 最終的には実習および国家試験において、必要な知識や能力の習得を目標とする。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 理学療法の一般原則 2. 心疾患における理学療法① 3. 心疾患における理学療法② 4. 心疾患における理学療法③ 5. 心疾患における理学療法④ 6. 呼吸器疾患における理学療法① 7. 呼吸器疾患における理学療法② 8. 呼吸器疾患における理学療法③ 9. 呼吸器疾患における理学療法④ 10. 事例検討① 11. 事例検討② 12. 急変時の対応(心肺蘇生法) 13. 糖尿病における理学療法の関わり 14. 在宅における理学療法の関わり 15. 内部障害理学療法のまとめ <p>順番はもう一つの講義との関係で変わることがあります。</p>
教科書	『呼吸・心臓リハビリテーション』/高橋哲也、間瀬教史編著/羊土社/2013年 『内部障害リハのための胸部・腹部画像読影のすすめ』美津島 隆、山内克哉監修/メジカルビュー社/2017年
参考文献	『リハビリテーション基礎評価学』/潮見泰藏 下田信明 編集/羊土社/2015年 『PT・OT ビジュアルテキスト 内部障害理学療法学』/松尾善美 編集/羊土社/2016年 『理学療法診療ガイドライン』日本理学療法士協会 編/株ガイアブックス/2015年
成績評価	後期試験、課題レポート、出席、授業態度等から総合的に評価する。 受講にあたって、予習復習を必ず行うこと。

科 目 名	発達障害理学療法
担 当 教 員	紀伊 克昌、堅田 志保、吉田 真司、上村 奈々恵
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 選択
履修対象・形態	3年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	代表的小児疾患を中心に、発達障害の特徴と基本的な評価方法や問題の捉え方を学び、運動療法を主とした理学療法手技について習得することを目的とする。特に、発達障害の評価方法の実技、脳性麻痺児のタイプ別理学療法、両親の関わりを含めた環境設定等についても学習し、系統的な理学療法が実践できるよう教授する。
授 業 の 目 的	<ol style="list-style-type: none"> 1. 小児疾患の治療を理論的に推論し解釈する 2. 代表的な小児疾患を中心に発達障害の基本的な問題の捉え方と理学療法の展開について理解する 3. 姿勢コントロールと随意運動コントロール評価と分析を習得する
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. ボバース概念の創始と変遷 2. 脳性麻痺治療におけるシステム理論の理解 (求心性システムと遠心性システム) 3. 脳性麻痺治療につながる正常発達の理解 4. 脳性麻痺と脳血管障害の治療における共通点 5. 実技 姿勢コントロールの理解 体幹のコントロール (骨盤の選択的運動・肩甲帯の選択的運動・多関節の運動連鎖) 6. 実技 姿勢コントロールの理解 体幹のコントロール (骨盤の選択的運動・肩甲帯の選択的運動・多関節の運動連鎖) 7. 実技 姿勢コントロールと随意運動コントロールの理解 (効率的な運動) 8. 脳性麻痺のタイプによる治療の理解 9. 実技 痙直型四肢麻痺の治療 10. 実技 痙直型両麻痺の治療 11. 実技 片麻痺の治療 12. 実技 低緊張、失調の治療 13. 実技 アトーゼの治療 14. 成人脳血管疾患の治療の理解・実技 片麻痺の治療 15. 実際の治療から考える
教 科 書	『理学療法ハンドブック』/協同医書
参 考 文 献	『脳麻痺の運動障害』/医歯薬出版 『片麻痺の評価と治療』/医歯薬出版 『脳性まひの類型別運動発達』/医歯薬出版 『英国ボバース講師会議によるボバース概念』/ガイアブックス
成 績 評 価	後期試験（筆記試験）とレポート 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	神経筋障害理学療法
担 当 教 員	鎌田 理之、加藤 直樹
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	3年次 後期 講義
授業科目概要	神経筋疾患や難病に対する障害の評価と基本的な理学療法を学ぶことを目的とする。具体的には、①神経筋障害に関する基本的な知識、②神経筋障害の評価方法、③神経筋障害別理学療法、④特に難病に対してはケアに配慮した理学療法、⑤生活活動能力や機能的予後等を学習し、系統的な理学療法が実践できるよう教授する。
授業の目的	神経筋疾患や難病に対する障害の評価と基本的な理学療法、具体的には、①神経筋障害に関する基本的な知識、②神経筋障害の評価方法、③神経筋障害別理学療法、④特に難病に対しては医学的リハビリテーションの観点に基づいた理学療法、⑤生活活動能力や機能的予後、リスク管理等を学習することを目的とする。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 神経筋疾患の理学療法総論 2. 運動失調症に対する理学療法：脊髄小脳変性症を中心に① 3. 運動失調症に対する理学療法：脊髄小脳変性症を中心に② 4. パーキンソン病（症候群）に対する理学療法①：総論（臨床経過、重症度） 5. パーキンソン病（症候群）に対する理学療法②：障害像の把握、評価 6. パーキンソン病（症候群）に対する理学療法③：目標設定、プログラム 7. 運動ニューロン疾患に対する理学療法：筋萎縮性側索硬化症（ALS）を中心に① 8. 運動ニューロン疾患に対する理学療法：筋萎縮性側索硬化症（ALS）を中心に② 9. 末梢神経障害に対する理学療法：総論、単ニューロパチー 10. 末梢神経障害に対する理学療法：多発ニューロパチー 11. 筋疾患に対する理学療法：筋ジストロフィー症 12. 筋疾患に対する理学療法：筋炎 13. 症例提示 14. その他（トピックス紹介など） 15. 総括
教 科 書	『ベッドサイドの神経の診かた 第18版』/田崎義昭、斉藤佳雄 著/南江堂/2016年
参 考 文 献	<p>(雑誌)『Journal of Clinical Rehabilitation』/医歯薬出版</p> <p>『ヒトの動きの神経科学』/松村道一、小田伸午 監訳/市村出版/2002年</p> <p>『標準理学療法学・作業療法学 神経内科学 第4版』/医学書院/2013年</p> <p>『標準理学療法学専門分野 神経理学療法学』/吉尾雅春 編/医学書院/2013年</p> <p>『パーキンソン病の理学療法』/奈良勲 監修、松尾善美 編/医歯薬出版/2011年</p>
成 績 評 価	後期試験、小テスト等により総合評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	脊髄障害理学療法
担 当 教 員	鎌田 理之、加藤 直樹
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 後期 講義
授業科目概要	脊髄疾患に対する障害の評価と基本的な理学療法を学ぶことを目的とする。脊髄に関する解剖、生理学の復習、疾患の特徴を振り返り、理学療法（運動療法）が適応となる問題点を現在の医学で考え得るレベルで明確にし、理学療法技術へと進める。また脊髄疾患の機能予後予測に合わせて、理学療法だけにとどまらず、リハビリテーション医療の観点から種々のアプローチについても、症例提示・検討等も交えながら教授する。
授業の目的	脊髄損傷を主とした脊髄疾患に対する障害の評価と基本的な理学療法、具体的には、①脊髄障害に関する基本的な知識、②脊髄障害の評価方法、③脊髄損傷（疾患）の障害別・病期別理学療法、④生活活動能力や機能的予後、リスク管理等を学習することを目的とする。
授 業 計 画	1. 脊髄障害理学療法総論
	2. 脊髄損傷に対する理学療法： 疫学、神経合併症など
	3. 脊髄損傷に対する理学療法： 総合評価(ASIA)、機能予後予測など
	4. 脊髄損傷に対する理学療法： 急性期の理学療法（呼吸理学療法含む）
	5. 脊髄損傷に対する理学療法： 回復期の理学療法
	6. 脊髄損傷に対する理学療法： 不全脊髄損傷に対する理学療法
	7. 脊髄障害に対する理学療法： 多発性硬化症、脳腫瘍（脊髄腫瘍など）
	8. その他（トピックス紹介など）、総括
教 科 書	動画で学ぶ脊髄損傷のリハビリテーション/田中宏太佳ら 編/医学書院/2010年
参 考 文 献	『脊髄損傷理学療法マニュアル 第2版』/岩崎洋 編/文光堂/2014年 『PT マニュアル 脊髄損傷の理学療法 第3版』/武田功 編著/2017年 『神経筋疾患・脊髄損傷の呼吸リハビリテーションガイドライン』/日本リハビリテーション医学会 監/ http://www.jarm.or.jp/wp-content/uploads/file/member/member_publication_isbn9784307750400.pdf （最終閲覧日：2019年2月27日）
成 績 評 価	後期試験、小テスト等により総合評価する。 受講にあたって予習、復習を十分行うこと。

科 目 名	地域リハビリテーション
担 当 教 員	鶴崎 智史、松尾 薫
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	<p>病院をはじめとした医療機関での治療から、施設や在宅での継続的な医療や介護領域における理学療法士の役割と意義を学習する。疾患の回復期から維持期のとらえ方を理解し、理学療法士以外の職種との連携を密にしてリハビリテーションチームとして、さらに地域社会も含めた対象者やその家族への心身への関わりを具体的に学習する。</p> <p>①地域リハビリテーションの意義と理学療法の役割、地域リハビリテーションの歴史的、社会的背景、社会保障制度の変遷について解説する。</p> <p>②地域リハビリテーションの流れ、障害の捉え方、介護予防について解説する。また、グループ訓練やレクリエーション指導の方法、地域リハビリテーションの事例を紹介する。</p> <p>③地域における施設での理学療法をはじめ、リハビリテーションの意義と役割を解説する。</p> <p>④通所リハビリテーション施設を通じた、地域社会におけるリハビリテーションの役割を解説する。</p>
授 業 の 目 的	<p>障害の発症から維持期に至るまで、障害とともに、住み慣れた地域で生活していくうえで一貫した理学療法が行われることが必要である。また、その時期に応じた理学療法が求められる。在宅生活の継続、地域での生活という意識の一般化に対して、制度や機関も整備されつつある。同時に、理学療法士も、地域の中で生活するための援助としての理学療法のあり方を学ぶ必要がある。</p>
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 地域リハビリテーションの総論（鶴崎） 2. 地域理学療法の概念（鶴崎） 3. 地域理学療法の関連制度と関連法規（鶴崎） 4. 地域理学療法の関連制度と関連法規（鶴崎） 5. 住宅環境整備とリスクマネジメント（鶴崎） 6. 住宅環境整備とリスクマネジメント（鶴崎） 7. 住宅環境整備(グループ学習)（鶴崎） 8. 予防理学療法(鶴崎)（鶴崎） 9. 住宅環境整備の実際（鶴崎） 10. 通所リハビリテーション施設を通じた、地域社会におけるリハビリテーションの役割を解説する。(松尾) 11. 個人対応と集団対応について運動療法の展開について学ぶ。生活習慣病対策、ターミナルケアと運動療法について理解する。(松尾) 12. 地域における連携において特に在宅への準備について、カンファレンス、自宅への訪問、住宅改造、社会資源の活用について学ぶ。(松尾) 13. 地域における連携での特に施設の取り組みについて、施設間連携、介護予防事業所との連携について扱う。(松尾) 14. 生活環境の整備(住宅改修、福祉用具)について事例から理解を深める。(松尾) 15. 総括(鶴崎)
教 科 書	『PT・OT ビジュアルテキスト 地域リハビリテーション学』/重森健太（編）/羊土社/2019』
参 考 文 献	適宜配布
成 績 評 価	<p>定期試験 80点 課題 20点</p> <p>成績評価の詳細は第一回目の講義で発表。</p>

科 目 名	老年期障害理学療法
担 当 教 員	水野 稔基
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 後期 演習
授業科目概要	<p>老化によって身体には形態的、機能的側面に変化が生じる。本演習では、老人疾患にみられる症状、病態、予後の理解をはじめ、特有な姿勢の変化と運動機能、呼吸機能、排泄機能、嚥下機能などの障害を学び、それらの障害に応じた評価法と理学療法を習得することを目的とする。障害の評価に基づいて、老人の生活自立に向けた系統的な健康管理や地域社会参加を促進するため、医学的管理の下に機能訓練などの理学療法技術を実践できるように教授する。</p> <p>①老化による運動機能の障害の評価法と理学療法の実践を教授する。 ②老化による内部障害などの障害の評価と理学療法の実践を教授する。</p>
授業の目的	老年期の障害の評価に基づいて、老人の生活自立に向けた系統的な健康管理や地域参加を促進するため、医学的管理下に運動療法などの理学療法技術を実践できるように演習する。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 総論 2. 廃用症候群 3. 退院支援 4. 在宅における全身管理とリハビリテーション 5. 終末期リハビリテーション，脳卒中のリハビリテーション 6. 神経変性疾患のリハビリテーション 7. 呼吸器疾患のリハビリテーション 8. 運動器疾患のリハビリテーション 9. 併存疾患と管理（認知症，せん妄） 10. 高齢者のがんリハビリテーション 11. 高齢者に多い問題①（低栄養，嚥下障害，フレイル・サルコペニア） 12. 高齢者に多い問題②（排尿障害，感染症・発熱，転倒） 13. リスク管理（意識障害，浮腫，血圧変動，不整脈，めまい） 14. 症例検討 15. 総括
教科書	『高齢者のリハビリテーション実践マニュアル』/宮越浩一 編/MEDICAL VIEW/2014
参考文献	なし
成績評価	後期試験、講義内課題、出席、授業態度等から総合的に評価する。 授業に際しては十分な予習と復習をすること。

科 目 名	スポーツ傷害理学療法
担 当 教 員	松尾 高行
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 選択
履修対象・形態	3年次 後期 演習
授 業 科 目 概 要	スポーツ活動中に生じたスポーツ傷害に対する理学療法を学ぶことを目標とする。スポーツ傷害とその評価、理学療法の意義、適切な運動と禁忌、スポーツ傷害の予防方法などについて学習する。スポーツリハビリテーションチームの一員としてスポーツ分野で理学療法士が活躍するためには何が必要なのかを事例を挙げて教授する。
授 業 の 目 的	スポーツ傷害における評価と理学療法を学ぶことを目的とする。評価、理学療法の方法を講義、演習にてスポーツ傷害に対する一連の流れを習得する。
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. スポーツ傷害理学療法学総論 2. 各論：【頸部】バーナー症候群・頸椎捻挫 3. ：【肩関節】腱板損傷・投球障害肩・肩関節脱臼 4. ：【肘関節】投球障害肘・テニス、ゴルフ肘 5. ：【手関節】TFCC 損傷 6. ：【腰部】腰痛症・椎間板ヘルニア・腰椎分離症・腰椎すべり症 7. ：【股関節・大腿】股関節インピンジメント (FAI)・肉離れ 8. ：【膝関節】前十字靭帯損傷・後十字靭帯損傷・内側側副靭帯損傷 9. ：【膝関節】半月板損傷・過度の使用による障害 10. ：【足関節】内反捻挫・過度の使用による障害 11. ：【スポーツ傷害予防】 12. 演習：【テーピング】上肢・膝関節 13. 演習：【テーピング】足関節 14. 演習：【メディカルリハビリテーション】 15. 演習：【アスレティックリハビリテーション】
教 科 書	『スポーツ理学療法』/三輪書店/2020年出版予定
参 考 文 献	<p>『Skill Up 下肢スポーツ外傷のリハビリテーションとリコンディショニング』 文光堂/2011年</p> <p>『実践PTノート運動器疾患の理学療法第2版』/三輪書店/2011年</p> <p>『アスリートケアマニュアル テーピング』/文光堂/2010年</p> <p>『アスリートケアマニュアル ストレッチング』/文光堂/2007年</p> <p>『スポーツ膝の臨床 第2版』/金原書店/2014年</p>
成 績 評 価	後期試験、課題レポートにより総合評価する。 講義に関して予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	理学療法特論
担 当 教 員	椎木 孝幸、南野 博紀、木村 佳記、荒木 智子
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 選択
履修対象・形態	4年次 後期 講義
授 業 科 目 概 要	近年、理学療法は様々な分野にて発展し、理学療法士の活躍の場、役割は拡大し、多岐にわたる知識・技術が必要となっている。国内外での臨床経験の豊富な理学療法士より、高齢者、身体障害者、発達障害者等の地域における実践的な理学療法を教授する。
授 業 の 目 的	実践的な理学療法の技術・知識を習得する 理学療法管理業務について理解する 卒業後のキャリアデザインをする
授 業 計 画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 理学療法管理業務 (椎木) 2. 生涯学習プログラム (椎木) 3. 障害者スポーツ支援Ⅰ (南野) 4. 障害者スポーツ支援Ⅱ (南野) 5. 科学的根拠に基づいた運動療法 (木村) 6. 超音波エコーを用いた理学療法評価 (木村) 7. ウィメンズヘルス理学療法Ⅰ (荒木) 8. ウィメンズヘルス理学療法Ⅱ (荒木)
教 科 書	適時資料を配布する。
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	レポート課題によって評価する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	義肢補装具学
担 当 教 員	荒木 智子、大垣 昌之、高木 啓至
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 必修
履修対象・形態	3年次 後期 講義
授業科目概要	障害者の残存能力の有用性を引き出し、日常生活活動機能を補うために義肢、装具、自助具などが処方される。本講義では、リハビリテーションに欠かすことができない福祉用具であり、障害者の自立支援用具として重要な義肢、装具、自助具についての基本的な知識について学習することを目的とする。そのため、義肢、補装具の名称・種類・分類・構造・材質・適応疾患について教授する。①義肢と補装具の適合判定、上肢と下肢切断者の術前と術直後の訓練方法について教授する。②義肢補装具の装着方法、装着時の問題点抽出、疾患・障害別適応と使用方法を講義し、理学療法での活用方法を実技をまじえて教授する。また、簡単な補装具の作製演習をとおして、個別適応と応用性を身につける。
授業の目的	運動器障害の代替手段である義肢補装具を具体的に学ぶことで理学療法の幅が大きく拡大する事を目的とする。各障害に適応する義肢、装具、自助具の実践的な理学療法での活用方法を理解する。
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 切断と義肢の基礎知識 アライメントの概念 (荒木) 2. 大腿義足・下腿義足 (荒木) 3. 下肢切断と義足装着前理学療法 (荒木) 4. 義足装着理学療法と応用動作 (荒木) 5. 義手と上肢切断 (荒木) 6. 上肢装具と自助具、車椅子、歩行補助具 (荒木) 7. 装具使用によるエビデンス (大垣) ※演習形式 8. 装具の臨床活用 (大垣) ※演習形式 9. 装具検討の実際 1 (大垣) ※演習形式 10. 装具検討の実際 2 (大垣) ※演習形式 11. 回復期・生活期の装具の実際 (大垣) ※演習形式 12. 大腿切断：大腿義足の構造および異常歩行 (高木) ※演習形式 13. 大腿切断：断端管理 (弾性包帯・断端機能トレーニング) (高木) ※演習形式 14. 大腿切断：模擬義足を用いた義足歩行の体験 (高木) ※演習形式 15. 義肢装具の支給体系とチームアプローチ (荒木)
教科書	『義肢装具のチェックポイント 第8版』/医学書院 『脳卒中片麻痺者に対する歩行リハビリテーション』/阿部浩明・大畑光司/メジカルビュー社/2016年 『歩行再建を目指す 下肢装具を用いた理学療法』/阿部浩明/文光堂/2019年
参考文献	『義肢装具学 第4版』/川村次郎ほか 編/医学書院 必要な資料を当日配布いたします。
成績評価	後期試験（筆記試験）とレポート、出席カードへの丁寧な記載および授業態度を総合的に判定する。 受講にあたって、予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	理学療法学総合演習 I
担 当 教 員	松野 悟之、濱岡 克伺、鶴崎 智史、栗田 剛寧、国宗 翔、水野 稔基
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 前期 演習
授業科目概要	臨床場面を想定し、学内授業で習得した障害評価の知識や技術を統合し、疾患と障害との関係や障害と生活環境の関連等を学習することを目的とする。障害評価を総合的に理解するために、模擬症例やグループ学習を多く取り入れ、思考能力と実践力を養う。
授業の目的	<ol style="list-style-type: none"> 1. 身体機能の評価について、既修範囲を復習し、実践能力を高める 2. 疾患を想定し、検査・測定を実施できるようになる 3. 検査の意義を理解し、各障害に関する知識を統合する 4. 動作観察から問題点を想起できるようになる
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 疾患名を考慮した評価項目の立案、情報収集、カルテ情報の解釈 2. 視診・触診の評価、画像評価、認知機能・注意機能の評価 3. 脳卒中片麻痺症例を想定した筋緊張・運動麻痺の評価 4. 筋力の評価 MMT の実践 5. 筋力の評価 MMT の実践、MMT の結果から読み取れるもの 6. 関節可動域検査の実際 7. 整形外科的検査法の実際 8. 神経系の評価・演習（表在・深部感覚神経、運動麻痺） 9. 神経系の評価・実践（病的反射、筋緊張、運動失調など） 10. バランス能力の評価 11. 筋パワーの評価 12. 敏捷能力の評価 13. 動作観察・動作分析 14. 動作観察・動作分析 15. 動作観察・動作分析
教科書	『標準理学療法学 神経理学療法学』/医学書院/吉尾雅春 編 『動作分析臨床活用講座』/石井慎一郎/メジカルビュー
参考文献	『標準理学療法学 理学療法評価学 第2版』/医学書院/内山靖 編
成績評価	前期試験、実技試験を総合して評価する。 講義に関して、十分な予習と復習をすること。

科 目 名	理学療法学総合演習Ⅱ
担 当 教 員	松野 悟之、濱岡 克伺、鶴崎 智史、栗田 剛寧、山野 宏章、国宗 翔、水野 稔基、石川 みづき
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	1単位 必修
履修対象・形態	3年次 後期 演習
授業科目概要	学内授業で習得した各障害の理学療法の知識や技術を統合し、主要な疾患を中心に、障害レベルに応じた理学療法の目標と治療プログラムの立案と具体的な実施方法について学習することを目的とする。効果的な理学療法（治療）を実施するため、模擬症例やグループ学習を多く取り入れ、思考能力と実践力を養う。
授業の目的	<ol style="list-style-type: none"> 1) 理学療法評価学で学んだ評価項目の意義を理解し、動作と検査結果等を結びつけることができる 2) 基本動作の誘導および介助から動作の評価ができるようになる 3) 基本的な症例の評価項目を抽出し、統合と解釈を実施することができる 4) 評価過程をまとめ、報告書を作成できる 5) 治療過程で再評価を行い、思考を振り返ることができる
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. ICF 2. リスク管理、評価項目の抽出 3. 歩行の観察 4. 歩行の観察と分析 5. 動作観察と分析（起居動作、座位動作など） 6. 動作観察と分析（立ち上がり動作、リーチ動作など） 7. 肩関節疾患の動作観察・分析と問題点抽出について 8. 肩関節疾患の動作観察・分析と問題点抽出について. 9. 脊髄小脳変性症症例の動作観察・分析と問題点抽出について 10. 脊髄小脳変性症症例の動作観察・分析と問題点抽出について 11. 運動器疾患症例の動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案 12. 運動器疾患症例の動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案 13. 脳卒中片麻痺症例の動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案 14. 脳卒中片麻痺症例の動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案 15. 脳卒中片麻痺症例の動作観察・動作分析、統合と解釈、治療プログラム立案
教科書	『PT 症例レポート赤ペン添削ビフォー&アフター』/相澤純也 他・編/羊土社 『動作分析臨床活用講座』/石井慎一郎/メジカルビュー 『脳卒中理学療法の理論と技術』 第2版/原寛美/メジカルビュー
参考文献	『標準理学療法学 神経理学療法学』/医学書院/吉尾雅春 編 『観察による歩行分析』/医学書院/月城慶一 他 訳
成績評価	後期試験、実技試験、課題レポートを総合して評価する。 受講にあたって、予習・復習・実技練習を十分行うこと。

科 目 名	総括セミナー I
担 当 教 員	専任教員
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	4 年 次 前 期 演 習
授 業 科 目 概 要	これまでの知識、技術を統括し、理学療法士国家試験対策セミナーを実施する。セミナーを受講し、自己学習、グループワークを円滑に実施するために、学習習慣、方法を習得する。グループワークにより、理解度の向上・学習の効率化を図る。
授 業 の 目 的	1. 理学療法士国家試験に向け、対策方法を十分に理解、習得し、グループワークを積極的に行うようになること。 2. 具体的な実施計画を立案し、到達目標を明確にすること。
授 業 計 画	<p>前期期間を通じて、以下の事項を実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 専門基礎分野を中心に国家試験過去問題・類似問題を解き、出題傾向と対策の要点を教授する。 2. 少人数のグループワークを実施し、知識の補充を図る。 3. 個々の年間スケジュールを立案し、到達目標を設定する。 4. 学習習慣、学習方法を確立する。 5. 専任教員による定期的な面談を実施し、状況を把握し、学習指導を実施する。
教 科 書	特に指定なし。
参 考 文 献	適宜配布
成 績 評 価	課題提出、前期試験により総合的に評価する。 受講にあたって、該当分野の予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	総括セミナーⅡ
担 当 教 員	専任教員
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	4 年 次 後 期 演 習
授 業 科 目 概 要	これまでの知識、技術を統括し、理学療法士国家試験対策セミナーを実施する。セミナーⅠを発展させ、理学療法専門分野を中心に対策セミナーを実施する。
授 業 の 目 的	1. 理学療法士国家試験に向け、対策方法を十分に理解、習得し、グループワークを積極的に行うようになること。 2. 専門基礎分野と専門分野を関連づけ、総合的に学習できること。
授 業 計 画	<p>後期期間を通じて、以下の事項を実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 専門分野を中心に国家試験過去問題・類似問題を解き、出題傾向と対策の要点を教授する。 2. 少人数のグループワークを実施し、知識の補充を図る。 3. 専門基礎分野と専門分野を関連づけ、実地問題に対する応用力を習得する。 4. 専任教員による定期的な面談を実施し、状況を把握し、学習指導を実施する。
教 科 書	理学療法士・作業療法士国家試験必修ポイント/医歯薬出版株式会社 専門基礎分野 基礎医学 2020 専門基礎分野 臨床医学 2020 基礎 PT 学 2020 障害別 PT 治療学 2020
参 考 文 献	適宜配布
成 績 評 価	課題提出、後期試験により総合的に評価する。 受講にあたって、該当分野の予習・復習を十分行うこと。

科 目 名	理学療法研究
担 当 教 員	幸田 利敬、稲垣 忍、小仲 邦、松田 淳子、松尾 高行、粕渕 賢志、 助川 明、井坂 昌明、神里 巖、松野 悟之、濱岡 克伺
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	2単位 選択
履修対象・形態	4年次 前期 講義
授 業 科 目 概 要	学習で抱いた疑問や気付いた矛盾を明らかにする思考過程と問題解決能力の向上を目的に一般的な研究の流れや手順を紹介し、批判的な文献の読み方、研究計画書の作成例や教員が関わる研究テーマについて紹介する。統計学の復習を含め、データの誤差管理やデータの再現性と研究の再現性の重要性について解説する。また本学の測定機器の説明や教員の研究内容、研究指導領域のプレゼンテーションを行い、研究に関する倫理観や方向性を解説し、学生の研究領域や具体的なテーマを決定させる。
授 業 の 目 的	理学療法研究では、具体的なテーマをもとに自ら研究する姿勢と能力を養うこと、また理学療法士として必要な知識を探求し、補充することを目的とする。将来、研究活動を行うことを想定し、プレゼンテーション技術も身につける。
授 業 計 画	4月に各教員より、研究指導テーマを公表する。 学生の希望テーマ及び教員をもとに、学生－教員のマッチングを行う。 ゼミ活動は各担当教員と学生との打ち合わせの上、研究指導などのスケジュールを決める。
教 科 書	なし
参 考 文 献	なし
成 績 評 価	抄録、発表内容、活動内容などにより総合的に評価する。

科 目 名	臨床体験実習
担 当 教 員	幸田 利敬、松田 淳子、松尾 高行、粕渕 賢志、井坂 昌明、神里 巖、 松野 悟之、濱岡 克伺、鶴崎 智史、栗田 剛寧、山野 宏章、国宗 翔、 水野 稔基、荒木 智子、石川 みづき
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	1 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	2 年 次 前 期 実 習
授 業 科 目 概 要	見学や体験を基本として、主に通所リハビリテーション（通所リハ）や訪問リハビリテーション（訪問リハ）の内容および理学療法を学ぶ。状況に応じて臨床実習指導者の指導のもと、通所リハや訪問リハにおける理学療法の一部等を経験する。今後の学習意欲と目的を明確にする。病院または施設の臨床実習指導者が本学教員と連携し臨床実習指導を行う。
授 業 の 目 的	見学を通して理学療法の意義と役割を理解する。基本的な評価や問診および業務の補助等を通して、理学療法介入について理解する。また、対象者やその家族および医療スタッフとの関わりを通して、コミュニケーション能力の向上を目指す。さらに理学療法士として今後習得しなければならない能力を認識する。
授 業 計 画	<p>1 週間を通じて、以下の事項を実施する</p> <ul style="list-style-type: none"> 理学療法業務の見学 理学療法評価の体験 理学療法業務の補助を体験 各職種との連携について学習 実習日誌の作成 <p>※ 学内において臨床実習に必要な知識・技術・態度を高めて臨むこと</p> <p>※ 実習前のオリエンテーションには必ず出席すること</p> <p>※ 実習へ行く前に、1 学年で学習した専門基礎系の内容の確認テストに合格すること。</p>
教 科 書	特に定めない
参 考 文 献	適宜必要な文献及び資料などを紹介する
成 績 評 価	臨床実習における知識・技能・態度と報告書の内容等を総合して評価する

科 目 名	臨床評価実習
担 当 教 員	幸田 利敬、松田 淳子、松尾 高行、粕渕 賢志、井坂 昌明、神里 巖、 松野 悟之、濱岡 克伺、鶴崎 智史、栗田 剛寧、山野 宏章、国宗 翔、 水野 稔基、荒木 智子、石川 みづき
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単 位、必 修・選 択	3 単 位 必 修
履 修 対 象・形 態	3 年 次 後 期 実 習
授 業 科 目 概 要	理学療法業務の見学、理学療法評価の体験、基本的動作の介助体験及び担当症例の理学療法評価を実施することで、理学療法の意義や役割を深く理解し、基本的な評価技術を習得、理学療法評価のプロセスを理解することを目的とする。また、対象者やその家族および医療スタッフとの関わりから、コミュニケーション能力の向上を目指す。病院または施設の臨床実習指導者が本学教員と連携し臨床実習指導を行う。
授 業 の 目 的	<ul style="list-style-type: none"> ・実習指導者の指導のもと、情報収集、観察、検査・測定、統合と解釈、問題点の抽出、目標設定を体験し、患者様の障害像が理解できること ・基本的な評価技術を習得すること
授 業 計 画	<p>3 週間を通じて、以下の事項を実施する</p> <ul style="list-style-type: none"> 理学療法業務の見学 症例の評価 症例の治療の補助 実習日誌と症例報告書（サマリー）の作成 <p>※ 学内において臨床実習に必要な知識・技術・態度を高めて臨むこと</p> <p>※ 実習前のオリエンテーションには必ず出席すること</p>
教 科 書	特に定めない
参 考 文 献	適宜必要な文献及び資料などを紹介する
成 績 評 価	臨床実習における知識・技能・態度と報告書の内容等を総合して評価する

科 目 名	臨床総合実習 I
担 当 教 員	幸田 利敬、松田 淳子、松尾 高行、粕渕 賢志、井坂 昌明、神里 巖、 松野 悟之、濱岡 克伺、鶴崎 智史、栗田 剛寧、山野 宏章、国宗 翔、 水野 稔基、荒木 智子、石川 みづき
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	6単位 必修
履修対象・形態	4年次 前期 実習
授業科目概要	前期の7週間、学外の病院または施設において実施する。臨床実習前後1週間に客観的臨床能力試験(OSCE)を実施し、学習成果を評価する。これまでの学内での学習および臨床評価実習での経験をもとに、実習指導者の指導の下、患者の障害像の把握、理学療法目標及び理学療法計画の立案、理学療法実践並びに効果判定についての実習を行う。病院または施設の臨床実習指導者が本学教員と連携し臨床実習指導を行う。
授業の目的	実習指導者の指導と助言のもと、一連の理学療法プロセス（情報収集、観察、検査・測定、統合と解釈、問題点の抽出、目標設定、治療計画の立案と実施、検証）を実施できるようになること。
授業計画	<p>8週間を通じて、以下の事項を実施する</p> <p>理学療法業務の見学</p> <p>症例の評価と治療の補助</p> <p>実習日誌と症例報告書（サマリー）の作成</p> <p>※ 学内において臨床実習に必要な知識・技術・態度を高めて臨むこと</p> <p>※ 実習前のオリエンテーションには必ず出席すること</p>
教科書	特に定めない
参考文献	適宜必要な文献及び資料などを紹介する
成績評価	臨床実習における知識・技能・態度と報告書の内容等を総合して評価する

科 目 名	臨床総合実習Ⅱ
担 当 教 員	幸田 利敬、松田 淳子、松尾 高行、粕渕 賢志、井坂 昌明、神里 巖、 松野 悟之、濱岡 克伺、鶴崎 智史、栗田 剛寧、山野 宏章、国宗 翔、 水野 稔基、荒木 智子、石川 みづき
実務教員による授業	実務内容をふまえた授業を教授する。
単位、必修・選択	8単位 必修
履修対象・形態	4年次 後期 実習
授業科目概要	後期の7週間、学外の病院または施設において実施する。臨床実習前後1週間に客観的臨床能力試験(OSCE)を実施し、学習成果を評価する。これまでの学内での学習および臨床評価実習での経験をもとに、実習指導者の指導の下、患者の障害像の把握、理学療法目標及び理学療法計画の立案、理学療法実践並びに効果判定についての実習を行う。病院または施設の臨床実習指導者が本学教員と連携し臨床実習指導を行う。
授業の目的	実習指導者の指導と助言のもと、一連の理学療法プロセス（情報収集、観察、検査・測定、統合と解釈、問題点の抽出、目標設定、治療計画の立案と実施、検証）を実施できるようになること。
授業計画	<p>8週間を通じて、以下の事項を実施する</p> <p>理学療法業務の見学</p> <p>症例の評価と治療の補助</p> <p>実習日誌と症例報告書（サマリー）の作成</p> <p>※ 学内において臨床実習に必要な知識・技術・態度を高めて臨むこと</p> <p>※ 実習前のオリエンテーションには必ず参加すること</p>
教科書	特に定めない
参考文献	適宜必要な文献及び資料などを紹介する
成績評価	臨床実習における知識・技能・態度と報告書の内容等を総合して評価する

教育課程変更に伴う 科目の読み替え

(旧)教育課程(2015年度まで)		(新)教育課程案(2016年度以降)
授業科目の名称		授業科目の名称
心理学概論	←	心理学
体育実技	←	健康スポーツ科学
健康スポーツ科学	←	健康スポーツ科学
心の健康と運動	←	心の健康と運動
人間関係論	←	人間関係学
学びと表現	←	キャリアセミナー
英語Ⅰ	←	英語コミュニケーションⅠ
英語Ⅱ	←	英語コミュニケーションⅡ
医学英語	←	医学英語
統計学	←	統計学
キャリアガイダンス	←	キャリアセミナー
キャリアセミナー	←	総括セミナーⅠ
情報処理演習	←	情報処理演習
公衆衛生学	←	公衆衛生学
生命倫理	←	生命倫理
運動器系解剖学	←	運動器系解剖学
内臓系解剖学	←	内臓系解剖学
運動器系生理学	←	運動器系生理学
内臓系生理学	←	内臓系生理学
解剖学実習	←	解剖学実習
生理学実習	←	生理学実習
人間発達学	←	人間発達学
運動学	←	運動学
病理学	←	病理学
臨床心理学	←	臨床心理学
内科学	←	内科学
整形外科学	←	整形外科学
神経内科学	←	神経内科学
精神医学	←	精神医学
小児科学	←	小児科学
救急医学	←	救急医学
老年期疾病論	←	老年期障害学
リハビリテーション医学	←	リハビリテーション医学
チーム医療論	←	チーム医療学
感染対策	←	感染対策
医療安全学	←	医療安全学

(旧)教育課程(2015年度まで)		(新)教育課程案(2016年度以降)
授業科目の名称		授業科目の名称
理学療法学概論	←	理学療法学概論
運動療法学	←	運動療法学
運動療法学演習	←	運動療法学演習
物理療法学	←	物理療法学
物理療法学演習	←	物理療法学演習
日常生活活動学	←	日常生活活動学
日常生活活動学演習	←	日常生活活動学演習
障害診断論	←	理学療法評価学
骨格系障害評価法	←	運動器障害評価法Ⅰ
筋系障害評価法	←	運動器障害評価法Ⅱ
神経系障害評価法	←	神経障害評価法
呼吸器障害評価法	←	内部障害評価法
循環代謝障害評価法	←	内部障害評価法
臨床運動学演習	←	臨床運動学演習
骨・関節障害理学療法	←	運動器障害理学療法 運動器障害理学療法演習
中枢神経障害理学療法	←	脳機能障害理学療法 脳機能障害理学療法演習
呼吸器障害理学療法	←	内部障害理学療法
循環代謝障害理学療法	←	内部障害理学療法演習
義肢補装具学	←	義肢補装具学
義肢補装具療法	←	義肢補装具学
理学療法学総合演習Ⅰ	←	理学療法学総合演習Ⅰ
理学療法学総合演習Ⅱ	←	理学療法学総合演習Ⅱ
臨床体験実習	←	臨床体験実習
臨床評価実習	←	臨床評価実習
臨床総合実習Ⅰ	←	臨床総合実習Ⅰ
臨床総合実習Ⅱ	←	臨床総合実習Ⅱ
理学療法研究論	←	理学療法研究
卒業研究	←	理学療法研究
神経筋障害理学療法	←	神経筋障害理学療法 脊髄障害理学療法

※令和2年度以降入学者 科目配当

	1年				2年				3年				4年			
	前期	必修	後期	選択	前期	必修	後期	選択	前期	必修	後期	選択	前期	必修	後期	選択
教育	心理学	2	心の健康と運動		教育学	2	臨床教育学	2								
	健康スポーツ科学	1	人間関係学	2	医学英語	1	公衆衛生学	2								
養	英語コミュニケーションI	1	英語コミュニケーションII	1												
	キャリアアセスナー	1	キャリアアセスナー	-			生命倫理	1								
教	統計学	2	脳と心	2												
	情報処理演習	1	法学	2												
科	社会福祉学	2														
	栄養学	2														
目	生化学	2														
	運動器系解剖学	2	内臓系解剖学	2	神経系解剖学	2	生理学実習	1	神経内科学	1	ペイトリハビリテーション	2				
専	感染対策	1	運動器系生理学	2	内臓系生理学	2	病理学	2	スポーツ傷害学	1	発達障害学	2				
			解剖学実習	1	救急医学	1	臨床心理学	2	老年期障害学	1						
基			運動学	2	医用画像学	1	内科学	2	精神医学	2						
			生活支援学	2	チーム医療学	1	整形外科科学	2	小児科学	1						
目							リハビリテーション医学	2	脳神経外科学	2						
							医療安全学	1	薬理学	1						
理	療法学概論	2	運動療法学	1	運動療法学演習	1	日常生活活動学	1	日常生活活動学演習	1	内部障害理学療法	1	総括セミナーI	1	理学療法特論	1
			物理療法学	1	物理療法学演習	1	神経障害評価法	1	内部障害評価法	1	内部障害理学療法演習	1	理学療法研究	2	理学療法管理学	2
専			理学療法評価学	2	運動器障害評価法I	1	運動器障害評価法II	1	運動器障害理学療法	1	発達障害理学療法	1	臨床総合実習I	8	総括セミナーII	1
					運動器障害評価法II	1	臨床運動学演習	1	運動器障害理学療法演習	1	神経筋障害理学療法	2	臨床総合実習II	8		
門					臨床運動学実習	1			脳機能障害理学療法	1	脊髄障害理学療法	1				
					臨床体験実習	1			脳機能障害理学療法演習	1	老年期障害理学療法	1				
科									地域リハビリテーション	2	スポーツ傷害理学療法	1				
									理学療法学総合演習I	1	義肢補装具学	2				
目									理学療法学総合演習II	1	理学療法学総合演習II	1				
									臨床評価実習	3						
		14		16		15		20		17		14		9		11
		5		5		0		0		2		4		2		1
		19		21		15		20		19		18		11		12

カリキュラムマップ～授業科目とディプロマ・ポリシーとの関連性～

科目区分	授業科目の名称	配当年次	ディプロマ・ポリシー					
			社会の理解	コミュニケーション能力の獲得	専門知識の獲得	専門技術力の獲得	探究心及び倫理観の育成	
教養教育科目	心身の健康と理解	心理学	1前		◎	◎		
		健康スポーツ科学	1前		◎	○		
		心の健康と運動	1後			◎		○
	コミュニケーションの理解	教育学	2前	◎				○
		臨床教育学	2後	◎				○
		人間関係学	1後	◎	◎			
		英語コミュニケーションⅠ	1前	◎	◎			
		英語コミュニケーションⅡ	1後	◎	◎			
		医学英語	2後		○	◎		
		キャリアセミナー	1通	◎	◎	○	○	◎
		統計学	1前		○	◎		◎
		情報処理演習	1前	◎	◎			
		脳と心	1後		○	◎		
	科学と社会の理解	法学	1後	◎				
		社会福祉学	1前	◎		◎		
		栄養学	1前			◎		
		生化学	1前			◎		
		公衆衛生学	2後	◎		◎		○
生命倫理		2後	◎				◎	
専門基礎科目	人体の構造と機能	運動器系解剖学	1前			◎		
		内臓系解剖学	1後			◎		
		神経系解剖学	2前			◎		
		運動器系生理学	1後			◎		
		内臓系生理学	2前			◎		
		解剖学実習	1後		○	◎	◎	○
		生理学実習	2後		○	◎	◎	○
		運動学	1後			◎	○	
	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進	病理学	2後			◎		○
		臨床心理学	2後		◎	◎		
		内科学	2後			◎		
		整形外科	2後			◎		
		神経内科学	3前			◎		
		精神医学	3前			◎		
		小児科学	3前			◎		
脳神経外科学		3前			◎			
救急医学		2前			◎	◎		
薬理学		3前			◎			
テリヘルシオン	リハビリテーション医学	2後	○		◎			
	生活支援学	1後	○	◎	◎	◎		
	チーム医療学	2前	○	◎	◎			
	感染対策	1前	○		◎	○		
	医療安全学	2後	○	○	◎	○		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	ディプロマ・ポリシー					
			社会の理解	コミュニケーション能力の獲得	専門知識の獲得	専門技術力の獲得	探究心及び倫理観の育成	
専 門 科 目	基礎理学療法	理学療法学概論	1前	○		◎		◎
		運動療法学	1後			◎		
		運動療法学演習	2前		○	◎	◎	○
		物理療法学	1後			◎		
		物理療法学演習	2前		○	◎	◎	○
		日常生活活動学	2後	○		◎		
		日常生活活動学演習	3前		○	◎	◎	○
		障害の評価	理学療法評価学	1後		○	◎	
	運動器障害評価法Ⅰ		2前		○	◎	◎	
	運動器障害評価法Ⅱ		2前		○	◎	◎	
	神経障害評価法		2後		○	◎	◎	
	内部障害評価法		3前		○	◎	◎	
	臨床運動学演習		2前		○	◎	◎	
	理学療法各論	運動器障害理学療法	3前			◎		
		運動器障害理学療法演習	3前		○	◎	◎	○
		脳機能障害理学療法	3前			◎		
		脳機能障害理学療法演習	3前		○	◎	◎	○
		神経筋障害理学療法	3後			◎	◎	
		内部障害理学療法	3後			◎		
		内部障害理学療法演習	3後		○	◎	◎	○
		発達障害理学療法	3後		○	◎	◎	○
		脊髄障害理学療法	3後	○	○	◎	◎	○
		地域リハビリテーション	3前	◎		◎		
		老年期障害理学療法	3後			◎	◎	
		スポーツ傷害理学療法	3後			◎	◎	
		理学療法特論	4後			◎	◎	◎
		義肢補装具学	3後			◎	◎	
		理学療法管理学	4後	◎		○		○
		理学療法学総合演習Ⅰ	3前		◎	◎	◎	◎
		理学療法学総合演習Ⅱ	3後		◎	◎	◎	◎
		総括セミナーⅠ	4前	◎	◎	◎	○	◎
		総括セミナーⅡ	4後	◎	◎	◎	○	◎
		理学療法研究	4前	○	○	◎	◎	◎
臨床実習	臨床体験実習	2前	◎	◎	◎	◎	◎	
	臨床評価実習	3後	◎	◎	◎	◎	◎	
	臨床総合実習Ⅰ	4前	◎	◎	◎	◎	◎	
	臨床総合実習Ⅱ	4後	◎	◎	◎	◎	◎	

◎ 主たる関連
○ 副たる関連

※平成28年度～31年度入学者 科目配当

専 門 科 目	1 年				2 年				3 年				4 年				
	前期	必修 選択	後期	必修 選択	前期	必修 選択	後期	必修 選択	前期	必修 選択	後期	必修 選択	前期	必修 選択	後期	必修 選択	
教 養	心理学	2		心の健康と運動	1		医学英語	1									
	健康スポーツ科学	1		人間関係学	2		公衆衛生学	2									
	英語コミュニケーションⅠ	1		英語コミュニケーションⅡ	1		生命倫理	1									
	統計学	2		脳と心	2												
	情報処理演習	1		法学	2												
	社会福祉学	2															
	栄養学	2															
	生化学	2															
	キャリアアゼミナー	1		キャリアアゼミナー	-												
	専 門 基 礎 科 目	運動器系解剖学	4		内臓系解剖学	2		内臓系生理学	3								
神経系解剖学		2		運動器系生理学	3		人間発達学	1									
感染対策		1		解剖学実習	1		救急医学	1									
				運動学	3		チーム医療学	1									
				<small>生物実験実習(9ハピリテラシーラボ工学)</small>	2												
専 門 科 目	理学療法学概論	2		運動療法学	1		運動療法学演習	1									
				物理療法学	1		物理療法学演習	1									
				理学療法評価学	2		運動器障害評価法Ⅰ	1									
							運動器障害評価法Ⅱ	1									
							臨床運動学演習	1									
							臨床体験実習	1									
	19 4			16 7			12 0		18 0		17 3		14 4		7 2		9 1
	23			23			12		18		20		18		9		10

カリキュラムマップ～授業科目とディプロマ・ポリシーとの関連性～

科目区分	授業科目の名称	配当年次	ディプロマ・ポリシー					
			社会の理解	コミュニケーション能力の獲得	専門知識の獲得	専門技術力の獲得	探究心及び倫理観の育成	
教養教育科目	心身の健康と理解	心理学	1前		◎	◎		
		健康スポーツ科学	1前		◎	○		
		心の健康と運動	1後			◎		○
	コミュニケーションと情報の理解	人間関係学	1後	◎	◎			
		英語コミュニケーションⅠ	1前	◎	◎			
		英語コミュニケーションⅡ	1後	◎	◎			
		医学英語	2後		○	◎		
		キャリアセミナー	1通	◎	◎	○	○	◎
		統計学	1前		○	◎		◎
		情報処理演習	1前	◎	◎			
	環境科学の理解と社会	脳と心	1後		○	◎		
		法学	1後	◎				
		社会福祉学	1前	◎		◎		
		栄養学	1前			◎		
		生化学	1前			◎		
公衆衛生学		2後	◎		◎		○	
専門基礎科目	人体の構造と機能	生命倫理	2後	◎				◎
		運動器系解剖学	1前			◎		
		内臓系解剖学	1後			◎		
		神経系解剖学	1前			◎		
		運動器系生理学	1後			◎		
		内臓系生理学	2前			◎		
		解剖学実習	1後		○	◎	◎	○
		生理学実習	2後		○	◎	◎	○
		人間発達学	2前		◎	◎		
		運動学	1後			◎	○	
	疾病と障害の過程の成り立ち及び回復	病理学	2後			◎		○
		臨床心理学	2後		◎	◎		
		内科学	2後			◎		
		整形外科	2後			◎		
		神経内科学	3前			◎		
		精神医学	3前			◎		
		小児科学	3前			◎		
		脳神経外科学	3前			◎		
		救急医学	2前			◎	◎	
		薬理学	3前			◎		
リハビリテーション	臨床検査学	3前			◎			
	スポーツ傷害学	3前			◎			
	ペインリハビリテーション	3後			◎			
	老年期障害学	3前	○		◎		○	
	発達障害学	3後	○		◎		○	
保健医療とリハビリテーション	リハビリテーション医学	2後	○		◎			
	生活支援学(リハビリテーション工学)	1後	○	◎	◎	◎		
	チーム医療学	2前	○	◎	◎			
	感染対策	1前	○		◎	○		
	医療安全学	2後	○	○	◎	○		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	ディプロマ・ポリシー					
			社会の理解	コミュニケーション能力の獲得	専門知識の獲得	専門技術力の獲得	探究心及び倫理観の育成	
専 門 科 目	基礎理学療法	理学療法学概論	1前	○		◎		◎
		運動療法学	1後			◎		
		運動療法学演習	2前		○	◎	◎	○
		物理療法学	1後			◎		
		物理療法学演習	2前		○	◎	◎	○
		日常生活活動学	2後	○		◎		
		日常生活活動学演習	3前		○	◎	◎	○
		障害の評価	理学療法評価学	1後		○	◎	
	運動器障害評価法Ⅰ		2前		○	◎	◎	
	運動器障害評価法Ⅱ		2前		○	◎	◎	
	神経障害評価法		2後		○	◎	◎	
	内部障害評価法		3前		○	◎	◎	
	臨床運動学演習		2前		○	◎	◎	
	理学療法各論	運動器障害理学療法	3前			◎		
		運動器障害理学療法演習	3前		○	◎	◎	○
		脳機能障害理学療法	3前			◎		
		脳機能障害理学療法演習	3前		○	◎	◎	○
		神経筋障害理学療法	3後			◎	◎	
		内部障害理学療法	3後			◎		
		内部障害理学療法演習	3後		○	◎	◎	○
		発達障害理学療法	3後		○	◎	◎	○
		脊髄障害理学療法	3後	○	○	◎	◎	○
		地域リハビリテーション	3前	◎		◎		
		老年期障害理学療法	3後			◎	◎	
		スポーツ傷害理学療法	3後			◎	◎	
		理学療法特論	4後			◎	◎	◎
		義肢補装具学	3後			◎	◎	
		理学療法学総合演習Ⅰ	3前		◎	◎	◎	◎
		理学療法学総合演習Ⅱ	3後		◎	◎	◎	◎
		総括セミナーⅠ	4前	◎	◎	◎	○	◎
		総括セミナーⅡ	4後	◎	◎	◎	○	◎
		理学療法研究	4前	○	○	◎	◎	◎
臨床実習		臨床体験実習	2前	◎	◎	◎	◎	◎
	臨床評価実習	3後	◎	◎	◎	◎	◎	
	臨床総合実習Ⅰ	4前	◎	◎	◎	◎	◎	
	臨床総合実習Ⅱ	4後	◎	◎	◎	◎	◎	

◎ 主たる関連
○ 副たる関連